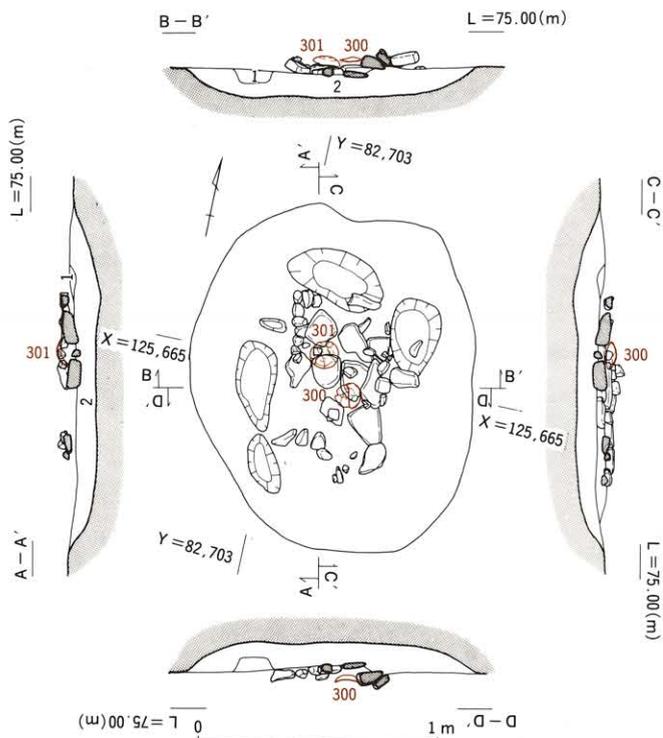


人骨は出土しなかったものの法量などからみて、他の石室墓同様に再葬墓としての位置づけが可能である。法量上は比較的大形であり、床面に用いる石材にもそれが反映している。出土した土器の型式から、6世紀末から7世紀初頭の年代が与えられる。石室墓全体を通して出土土器が少ないため、年代の明かな例は非常に貴重である。

7号石室墓 (ST1007) (第96図)



第96図 ST1007平断面図・遺物出土状況

位置と現状

第12調査区中央部、AC-21グリッドに位置する。石室墓群の西南端にあたるとともに、SD1004に隣接する。包含層の掘り下げの際に礫床が検出され、その時点ですでに上部の構造は削平のために失われていた。

墓壇の規模・形態

墓壇はやや歪んだ長楕円形を呈しており長軸1.45m、短軸1.19mの規模をもつ。浅い皿形の掘り込みで、現状での深さは0.11mである。埋土は

基盤層のものと類似しており、墓壇を掘り込む際の土を用いていることが想定される。

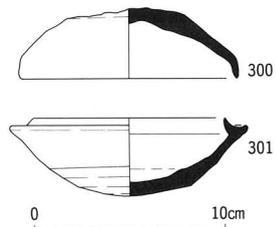
石室の構築状況

7号墓もやはり壁体を失っているために、抜き取り穴からその概要をみると、平面プランは長方形で、内法は長軸で0.81m、短軸で0.49mを測る。N-17-Wに主軸をもつが、頭位などは不明である。床面は一辺10~20cmの平たい礫を敷き並べ、鶏卵大の円礫を隙間に充填し、面を整えている。礫床床面のレベルは標高74.9mで、検出面とほぼ一致している。小口部の壁体は北側は一石で構成され、側壁は三石で構成されたとみられる。礫床床面中央部からは須恵器の蓋杯一組が出土した。その場で細かく砕けていたため完形に復元することができ、本来の副葬位置に近いものとみられる。

出土遺物 (第97図)

須恵器の蓋杯はともに礫床上より出土したもので、本来のセット関係とみられるが色調に違いがあり焼成の条件は異なっていたようである。口径・器高の小型化が進んだもので、回転ヘラケズリは施されず回転ヘラ切りの痕跡を明瞭にとどめる。蓋300では、成形後に反時計回りに土器を回転させて切り放した状況がみてとれる。杯身301では、ヘラ切りの痕跡を丁寧にナデ消してある。田辺氏の TK209型式に相当する。

法量などからみて再葬墓と考えることができる。副葬された須恵器は、田辺氏の編年の TK209型式に相当し、6世紀末から7世紀初頭の年代を充てることが可能である。このことは同様の構造をもつ石室墓の年代を考える上で、重要な意味をもつものである。



第97図 ST1007出土須恵器

8号石室墓 (ST1008) (第98図)

位置と現状

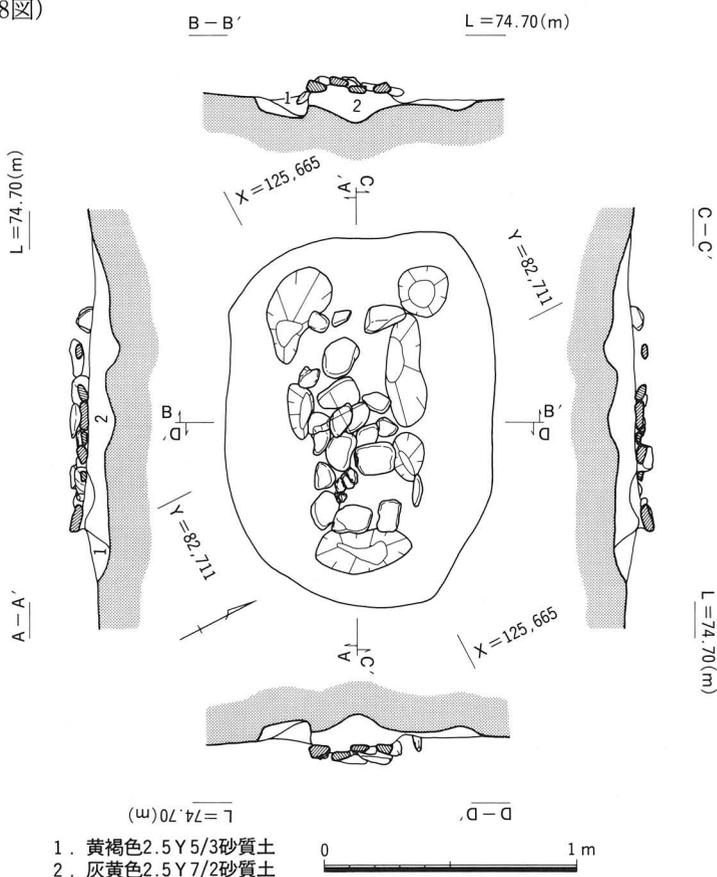
第12調査区中央部、AB・AC-22グリッドに位置する。石室墓群の南端である。包含層除去時に検出されたが、その時点ですでに削平のために上部の構造を失っており、礫床も現位置から多少動いている。

墓壇の規模・形態

墓壇は長楕円形を呈しており長軸1.47m、短軸1.06mの規模をもつ。皿形の浅い掘り込みであり、現状での深さは0.11mである。墓壇内の埋土は基盤層の土と同様の特徴をもつ砂質土であるが、やや粒子が粗い。

石室の構築状況

石室はその壁体をすべて失っているが、抜き取り穴によっておおよその概要を知ることが



第98図 ST1008平・断面図

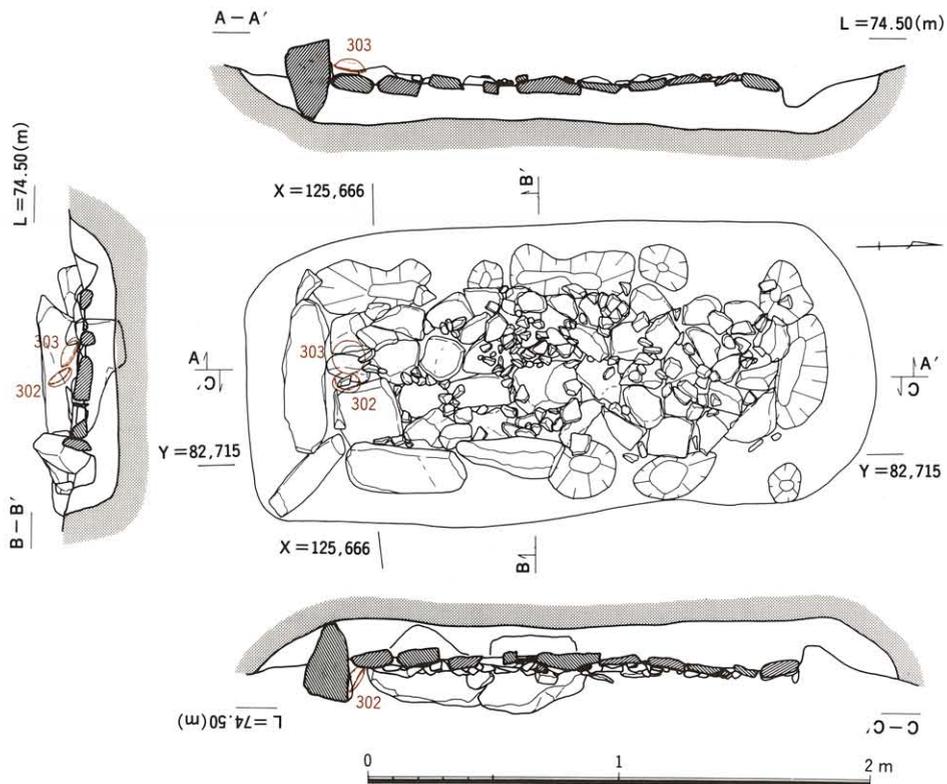
できる。石室の平面プランは長方形で、内法は長軸0.91m、短軸0.39mである。主軸はN-63°-Wで、頭位方向は不明である。床面は一辺10~15cmの平たい礫を敷き並べ、径5cmほどの小礫を隙間に充填している。礫床床面のレベルは標高74.5mで、検出面とほぼ一致している。副葬土器はなかった。

法量などの面からみて4~7号墓同様、再葬墓と考えられる。築造時期は副葬土器からおさえることができないが、再葬墓としての性格からみて、6号墓・7号墓と同様の6世紀末とみてよいだろう。

9号石室墓 (ST1009) (第99図)

位置と現状

第12調査区南東端、AC-23・24グリッドに位置する。これは第12調査区に展開する石室墓群の南東の一角となる。調査区の南東部分の地形は、北西部からの緩やかに傾斜しているおり、上面に若干の堆積がみられたが、天井石などの上部の構造はほとんどが失われていた。壁体を構成する石材は南側小口の1段目が一部残存するのみであった。その他の壁体につい

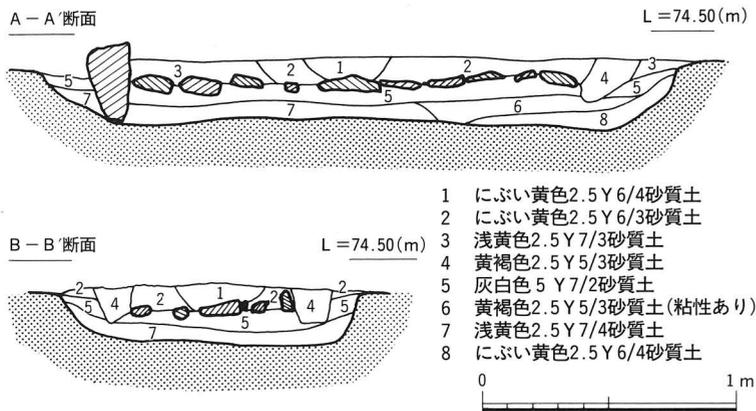


第99図 ST1009平・断面図・遺物出土状況

ては、石材が抜き取られた痕跡により、およそその位置関係を把握することができる。

墓墳の規模・形態

長楕円形の平面形態をもち、長軸2.49m、短軸1.19mの規模を測る。現状での深さは0.24mで、床



第100図 ST1009土層図

面のレベルからみて掘り込みの面と検出面は一致していると考えられる。墓墳内の堆積土は4層に分けられ(第100図)、これらが墓墳形成時の工程に関連するものとみると、ST1004~1008と比較して丁寧なつくりをもつことになる。

石室の構築状況

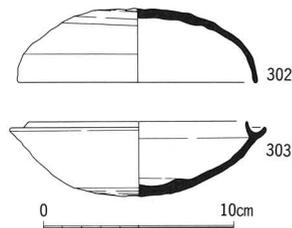
石材はいずれも砂岩の自然礫を用いており、壁体と礫床床面では形態・寸法がやや異なる。壁体では板状の石をたてており、その底面は床面よりも15cmほど深い。2段目以上の石材は小口積みとしていたと想定される。平面プランは基本的に長方形であるが、中央部でわずかに張る。南東角の短側壁と長側壁との間には、一石斜めにはいる石があり、平面プランのコーナー部分に丸みをもたせている。長側壁は両側とも4石で、北側小口部分は南側小口部と同様の構成とみられる。礫床は一辺15~30cmの平たい礫を敷き並べ、その隙間を鶏卵大の円礫を充填している。床面のレベルは標高74.35mであるが、北側が南側と比べて2~4cm高く、南側へ向けわずかに傾斜している。

法量・主軸・頭位

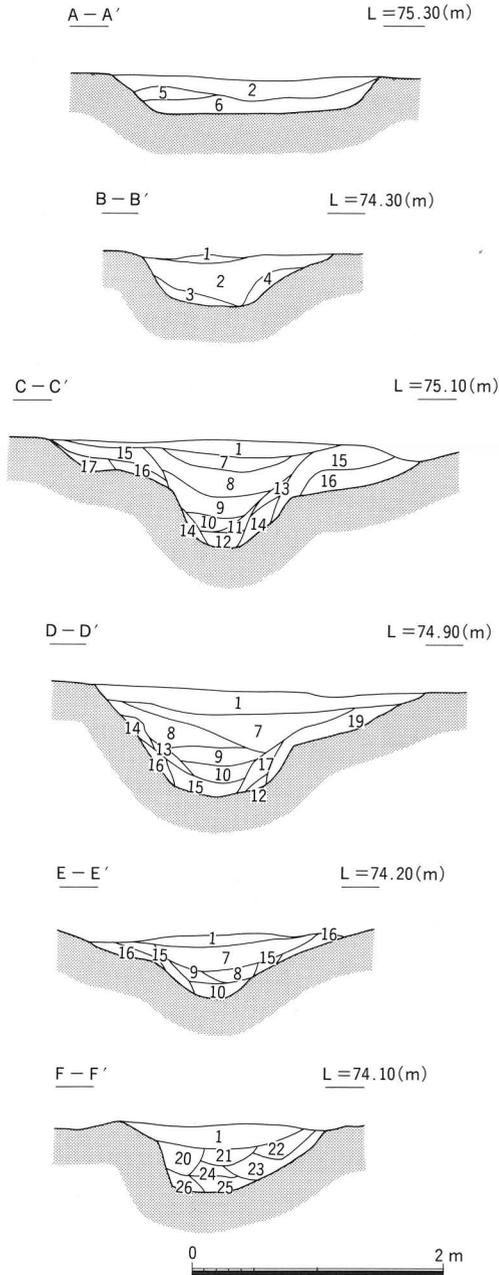
石室の内法は長軸で1.84m、短軸中央部で0.63m、小口部0.53mである。主軸はN-1°-Eでほぼ南北に向いているが、南側短側壁沿いに須恵器の蓋杯一組が逆転した状態で置かれていた。頭位は、床面が北側をわずかに高くつくっていることから北側と推定される。この場合、副葬された須恵器は足元に置かれていたことになる。

出土遺物(第101図)

出土した須恵器の蓋杯はいずれも口径・器高ともに小形のもので、色調などから本来のセットとみられる。杯身303は内面のかえりが短く、上方へ反り、受け部の端部も上方へ折れる特徴を有するものである。2点ともに回転ヘラケズリの範囲が狭く、



第101図 ST1009出土須恵器



- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1 黄灰色2.5Y5/1砂質土 | 14 にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 |
| 2 にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 | 15 浅黄色2.5Y7/3砂質土 |
| 3 浅黄色2.5Y7/3砂質土 | 16 にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 |
| 4 灰黄色2.5Y6/2砂質土 | 17 浅黄色2.5Y7/4砂質土 |
| 5 浅黄色2.5Y7/3砂質土 | 18 明黄褐色2.5Y7/6砂質土 |
| 6 オリーブ褐色2.5Y5/4砂質土 | 19 明黄褐色2.5Y7/6砂質土 |
| 7 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 | 20 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 |
| 8 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 | 21 黄褐色2.5Y5/3砂質土 |
| 9 黄褐色2.5Y5/4砂質土 | 22 浅黄色2.5Y7/4砂質土 |
| 10 にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 | 23 にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 |
| 11 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 | 24 にぶい黄橙色10YR7/3砂質土 |
| 12 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 | 25 にぶい黄橙色10YR7/3砂質土 |
| 13 にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 | 26 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 |

第102図 SD1004堆積土層図(断面ポイントは、第77図に記入)

調整の手間を若干省いている。形態の特徴から田辺氏の須恵器編年のTK209型式に相当し、6世紀末から7世紀初頭の年代が与えられる。

9号墓は、その構造において共通する小石室墓群のなかでも、やや特殊な位置を占める。その規模が他の5基と比較して卓越しているという点からは、小石室墓群の中でも中核的な存在であることが窺える。また、他の5基が規模の面から再葬墓として位置づけられるのに対して、内法長1.84mは通常の埋葬に十分な法量である。したがって、その性格も再葬墓ではなく、単一の埋葬のためのものとみることが出来る。築造された年代は須恵器から6世紀末であり、古墳群全体の造営のピークに時期と重なる。

4号溝 (SD1004) (第102図)

第12調査区・第13調査区をほぼ南北に直線的に縦断する溝である。検出された延長は65.2mであるが、北端は削平や自然流路などで切られているため、本来はさらに北へ伸びていたことが想定される。溝底のレベルはA-A'断面では標高74.60m、F-F'断面では73.25mであり、緩やかに北から南へ傾いている。流れの方向は第12調査区部分で南から7°東へ向いているが、第13調査区部分

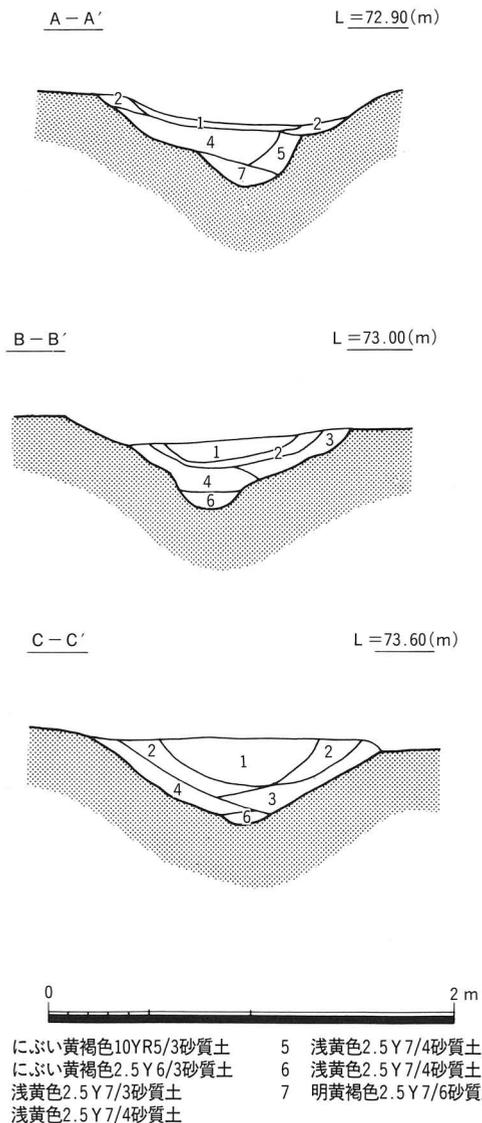
では15° と徐々に東側に振っている。幅は第12調査区で1.52~2.92m、第13調査区で1.90~2.65mとなっており、削平を受ける度合いの少ない箇所ほど幅広となっている。このことは深さにも現れており、0.30~0.91mの間で変化する。

埋土は基本的に黄褐色形の砂質土であるが、色調的な差異は全般に乏しく、砂岩の風化礫の混入の度合いが重要な分層の根拠となった。堆積土の観察からC-C'、D-D'、E-E'、F-F'の各断面では1~3度の再掘削の行われている状況がみられた。

溝の肩部からチャート製のナイフ形石器が1点出土した他は、埋土中には土器が1点も年代を決める根拠にも乏しいが、SD1002・1003、SD1005との位置関係や、古墳群の中心部を縦断していることも考慮にいと、古墳時代後期に築造され埋没したとみてもよいであろう。そうした場合その機能が問題となるが、SD1002・1003でみられたような大規模なものは少ないが、数回の再掘削の痕跡が認められることから、古墳群の展開だけでなく、生活面での役割も考えておくべきであろう。

5号溝 (SD1005) (第103図)

第14調査区を長軸方向に縦断する溝である。検出された延長は27.2mで、幅はもっとも広い調査区南端で1.9mをはかる。深さは比較的残りの良い南側で40cm余りであるが、第13調査区のレベルなどからみると、開墾によって地形にかなり手が加えられており、本来の溝の規模はさらに大きなものであったことが想定される。溝底のレベルは標高で北から72.8m、72.2m、72.0mと北から南に向かっての流れが考えられる。流れの方向は調査区の北半ではS-40°-E、南半ではS-35°-E



第103図 SD1005堆積土層図 (断面ポイントは、第76図に記入)

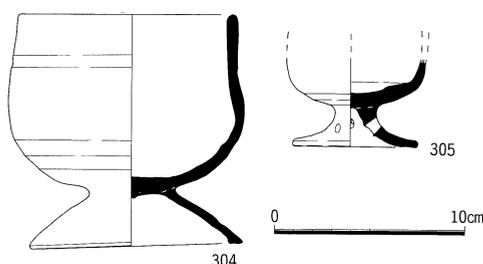
とやや南寄りに途中で角度を変えている。

堆積は基本的に砂質土で、その他の溝 (SD1001~1004) と比較すると、しまりが悪く、小礫を多く含むなど、その質に違いがある。

堆積土中には遺物は含まれていなかった。第14調査区は盛り土と攪乱が著しく、出土遺物は近世から近代のものが中心であり、5号溝の年代そのものも断定しがたいが、溝と古墳群の位置関係を勘案すると、古墳群築造の最も盛んであった6世紀後半から7世紀初頭とみることができる。

石室状石組

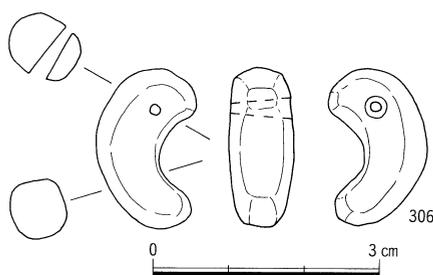
第12調査区と第13調査区との境界部分、7号墳・8号墳周濠の外縁に接する位置に砂岩の自然礫の集中する地点があり、若干の遺物がまとまって出土した。当初石室墓の可能性があるとみて10号墳の番号を与えていたが、調査が進むにつれて遺構ではないことが明かとなった。



第104図 第12調査区石室状遺構出土須恵器

須恵器 (第104図)

2点の遺物が図化可能であったが、いずれも台付の椀となるもので、304はほぼ完形である。2点とも椀部分の下半が球形となる点に共通の要素が認められるが、脚部の形状・透かし穴に差異がみられる。304の椀部は直立した口縁を有し、上半にはきわめて弱い2条の沈線を巡らせる。こうした台付椀の形態は6世紀の後葉にもっとも多くみられる形態であり⁽⁷⁾、7号墳に帰属するとしても、年代的な矛盾はない。



第105図 第12調査区石室状遺構出土勾玉

勾玉 (第105図)

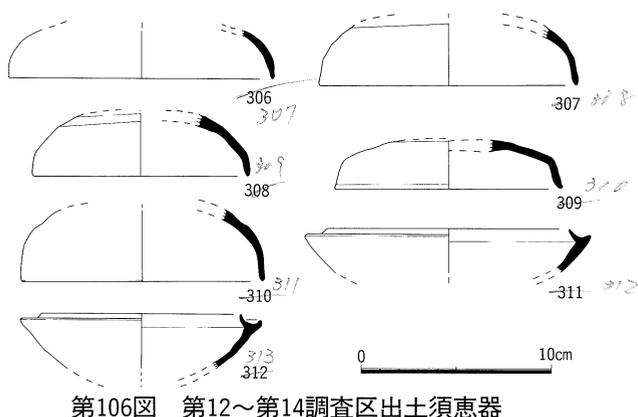
ひすい製でC字状を呈する、1号墳出土のもの(45)よりもやや小形で、素材の質もやや不良である。小形のためか背の湾曲は強く、頭部の角張りも強い。穿孔は主として図右側の側面より行われている。

包含層出土の遺物 (第106~108図)

須恵器 (307~313)

出土した須恵器はいずれも細片となっており、図化した7点の他に頸部のみの磁片がある。

第13調査区で出土した蓋307・308は7号墳出土の高杯の蓋と共通の胎土・色調をもつ。第12調査区で出土した2点の杯は、いずれも立ち上がりが内傾して短いものである。これらの須恵器は図を掲載しなかった甕も含めて田辺氏編年のTK43型式からTK209型式に位置づけられ、調査区内の遺構と年代がほぼ一致する。



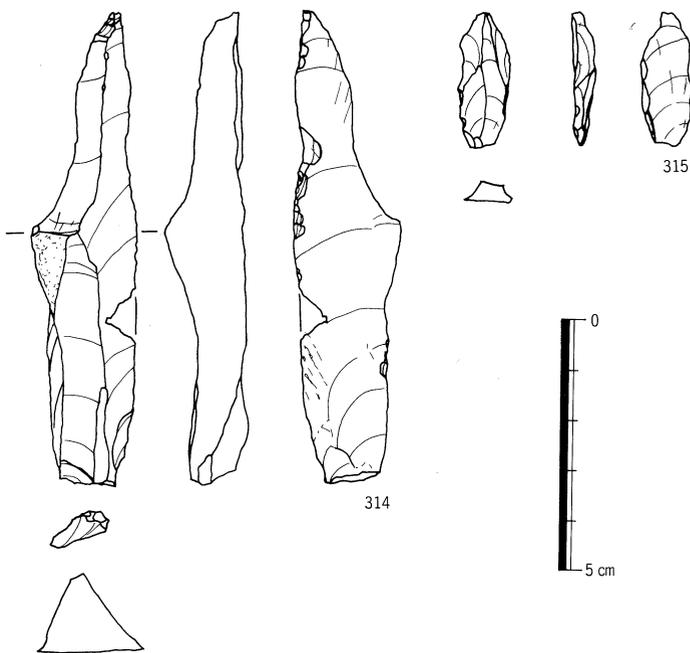
第106図 第12～第14調査区出土須恵器

旧石器 (314・315)

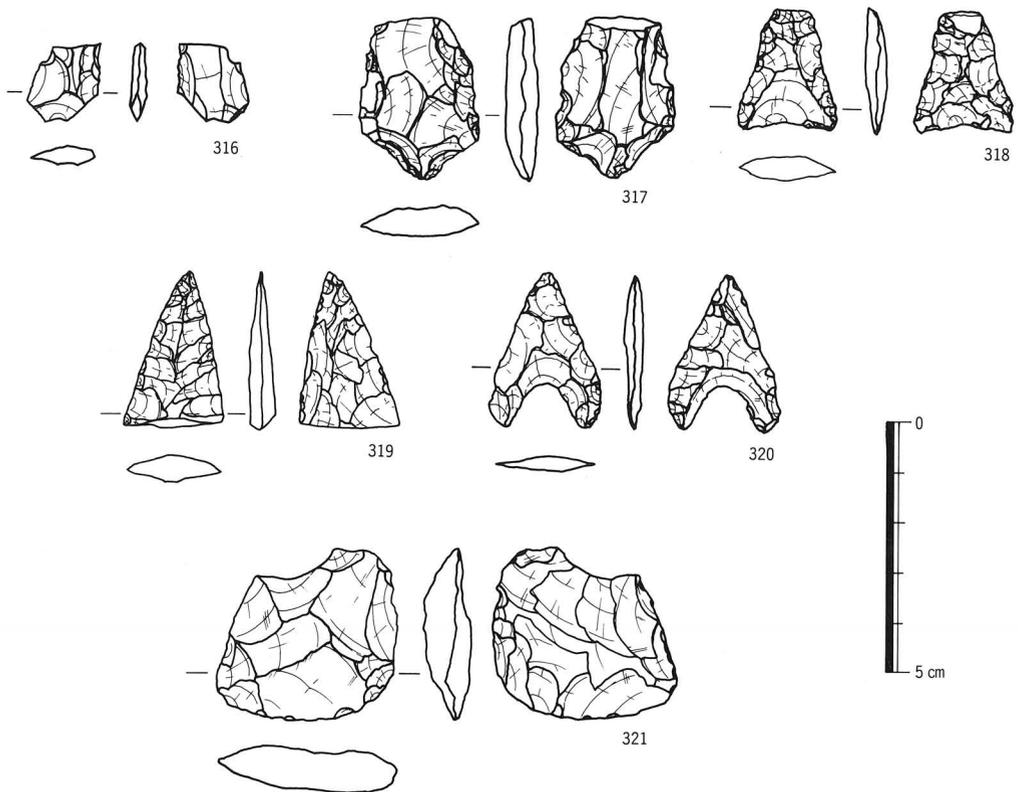
314はサヌカイト製ナイフ形石器である。素材は縦長剥片で、先端の一部に加工がみられる。長さ94.85mm、幅22.30mm、重さ22.53gを測る。315はチャート製の小形のナイフ形石器である。縦長剥片を素材としている。長さ27.80mm、幅10.30mm、重さ1.31g。基部を中心に細かい調整が行われている。

石器 (316～321)

316～321はいずれもサヌカイト製の石器である。317～320は石鏃で、316は未製品と考えられる。317は凸基式、318・320は凹基式である。全体の形状・基部の形状・茎部の有無などに大きな差がある。320は基部のえぐりが大きく、表面の風化が他の石器より進行しており、縄文時代までさかのぼる可能性がある。321はスクレイパーで下端部に使用痕跡がみられる。320を除くと弥生時代中～後期に属するとみられる。第12～第14調査区において弥生土器は若干出土しているものの、縄文土器に



第107図 第12～第14調査区出土旧石器



第108図 第12～第14調査区出土石器

については出土がなく、遺構の広がりには近接地には想定し難い。

注

- (1) 以下、石鏃の分類・部分名称などは、平井勝『弥生時代の石器』（考古学ライブラリー64 ニュー・サイエンス社 1991）による。
- (2) 『陶邑古窯址群』平安学園考古クラブ 1996
田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1982
- (3) 西弘海「土器様式の成立とその背景」『土器様式の成立とその背景』真陽社 1987
『古代の土器1 都城の土器集成』古代の土器研究会 1992
- (4) 山崎信二『横穴式石室構造の地域別比較研究 一中・四国編』1986
- (5) 湯浅利彦「『五角形鏃』小考—西日本における縄文時代晩期を中心とした打製石鏃の素描—」
『徳島県埋蔵文化財センター紀要 真朱』第1号 1992
- (6) 山田邦和「裝飾付須恵器総覧—裝飾付須恵器の基礎的研究3—」『古代学研究所研究紀要』
第2輯 1992
- (7) 藤川智之「須恵器椀・台付椀の検討」『徳島県埋蔵文化財センター紀要 真朱』第2号 1994

3 まとめ

1 旧石器の問題点

柿谷遺跡で出土した旧石器は点に及び、異なった地点から異なった様相の石器が出土している点が注目される。その地点と主な石器は以下の通りである。

①第1～第3調査区のチャート製(1)、サヌカイト製ナイフ形石器(2)、サヌカイト製剥片(3・4)

②第6調査区のサヌカイト製の剥片・スクレイパー(85～88)

③第12調査区のチャート製ナイフ形石器(315)

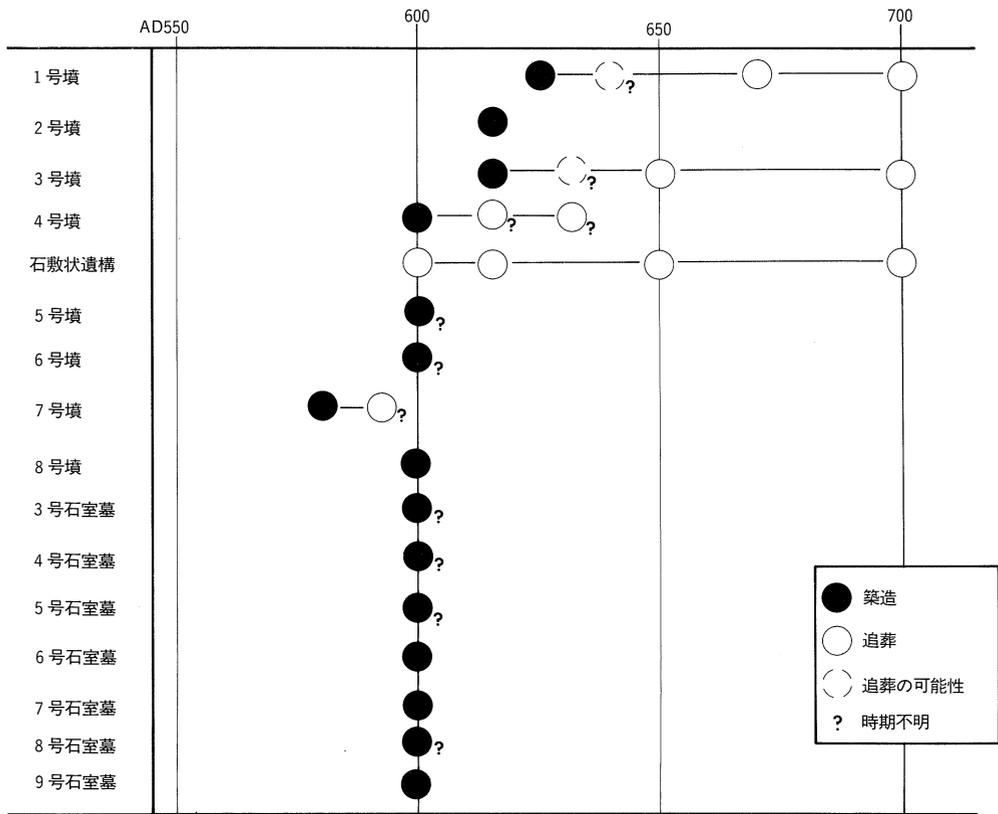
④第13調査区のサヌカイト製ナイフ形石器(314)

第6調査区で出土した4点の石器は、1号墳横穴式石室の排水溝周辺の比較的狭い範囲に集中していた。サヌカイト製の剥片及びスクレイパーであり、他の3地点にはみられない大形のもので占められている。87には新しい剥離がみられ、後世に転用のための調整を行っている可能性もあるが、調整技法は4点に共通するものであり旧石器と認識しておく。徳島県内ではこうした大形の剥片を中心とする石器組成は現段階では知られておらず、香川県国分台遺跡群⁽¹⁾出土の資料などとの対比から縄文時代草創期にさかのぼる可能性が指摘できる。

第1調査区・第12調査区ではチャート製のナイフ形石器が1点ずつ出土した。形態・法量が異なるばかりではなく、素材とする剥片も違っており、別の技法に立脚するものである。石材として用いられたチャートは地質区分で言う「秩父帯」に包含されており、遺跡の所在する和泉帯・隣接する三波川帯には含まれておらず、秩父帯を流れる勝浦・那賀・桑野の各河川流域よりもたらされたものである。吉野川北岸・和泉帯において、チャートを素材とする石器群は板野郡土成町金蔵～上井遺跡においても出土している⁽²⁾。2遺跡の不完全な資料のみでは多くを語る段階ではない。サヌカイトを素材とする石器との比較検討や石材獲得のシステムについては、今後の資料の増加によって深められるべきテーマであろう。

第13調査区で出土したナイフ形石器は、縦長剥片を素材とするものである。背面には上下より交互に剥離が行われており、下面には打面調整の痕跡がみられる。瀬戸内技法によるものではなく石刃と共通の技法によるものである。

ナイフ形石器は3地点より出土しているが、石材・形態などに変化がみられる。それぞれの位置関係もそれぞれ数十m離れていることをも考慮すれば、年代も若干異なる別々の石器群を構成しているものとみるべきであろう。



第110図 各遺構の造営過程

2 柿谷遺跡における古墳群の築造

群集墳形成の過程

柿谷遺跡で検出された横穴式石室は8基で、もっとも古い型式の土器が出土したのは第13調査区の7号墳である。その後出土した須恵器と横穴式石室の型的な変化をもとに各遺構の年代を模式図に示した(第110図)。造営は6世紀後葉に始まり(7号墳)、西暦600年頃にもっとも多く(3・5・6・8号墳、3～9号石室墓)の築造が行われるとともに、7号墳では6世紀の末までに追葬が行われていた可能性があり、追葬の最初の段階が古墳群造営のピークの時期と重なっている点が興味深い。7世紀の前葉段階では、3基の古墳(1～3号墳)が築造されるが、1号墳が土器の型式で一段階遅れる。1号墳・3号墳・4号墳において比較的短い間隔での追葬があり、これらは7世紀前半のうちに行われたとみることができる。以後追葬活動は弱まり、3号墳で西暦650年頃と800年頃にそれぞれ一度、1号墳で7世紀後葉と800年頃にそれぞれ一度行われ、以後の古墳群をめぐる状況は不明である。石敷状遺構の上面および下面より出土した土器の年代が、3号墳・4号墳の造営過程と一致していることは石敷状遺構が古墳破壊によって成立したことを示す。

こうした造営過程で注目されるのは、6世紀後葉の7号墳が古墳群内の東端に近い位置にあり、直後の段階に墳丘を寄せるようにして8号墳が築かれる一群（仮に東群とする）と、4号墳→2号墳・3号墳→1号墳と北からほぼ南へ順に築造する一群（仮に西群とする）がみられる点である。この二つの系譜を一連の古墳の造営活動とみなせば、東群の8号墳と西群の3号墳は同年代であるから、造営活動の中心部は左回りに移動していったこととなる。土器の出土がなく横穴式石室の形態も不明部分の多い5号墳・6号墳を、西暦600年前後に位置づけた理由はここにもある。むしろ3号墳に近い年代まで下げて考える余地もある。

以上の検討によると、6世紀後葉から西暦800年頃までの古墳群の一連の造営活動の流れが途切れなく100年を越えて続いていることができる。遺跡の範囲が調査区外に広がっていることは当然推定される事柄ではあるが、一連の流れが完結しているという点では柿谷遺跡における古墳群のうちの一支部の状況は捉えることができたと考えられる。徳島県内においては、徳島市から西郡石井町にかけての気延山山塊や天河別神社古墳群を中心とする鳴門市大麻町周辺で前方後円墳が数基みられ、首長の系譜を見いだすことが可能であり、古墳時代を通じた造墓活動も行われている。しかし、これらの地域ではある程度の面積をもつ大規模な調査は行われておらず、その群構成の解明は充分に行われていないのが現状である。こうした状況をふまえ、6世紀後半以降の限られた年代ではあるが、完結した流れを確認することができたことは大いに意義がある。

横穴式石室の形態・構造

7号墳の横穴式石室は玄室の中央部が膨らむ胴張りの形態をとっており、その平面プランからは美馬郡・麻植郡を中心に分布する「忌部山型」石室の範疇に含まれる。上部構造が不明である点は惜しまれるが、県内の横穴式石室の平面プランを通覧するに忌部山型の一つのバリエーションとみてよいであろう。7号墳より後出の横穴式石室の内、4号墳・3号墳・1号墳については胴張りの傾向が薄れ、狭長な長方形へと形態が変化する。また、7世紀以降には複室構造の導入が行われているが、その形態は形骸化が進んだものである。

こうした形態の変化については須恵器の編年的な問題とも併せて述べたことがある⁽³⁾ので、詳しくは触れない。次項では、やや大形の7号墳・4号墳・3号墳・1号墳が築造された時期に並行して、こうした横穴式石室築造の原理に則らない古墳の存在について注意しておきたい。

小形の横穴式石室の並存と群構成

2号墳・5号墳・8号墳は無袖の横穴式石室であり、規模的にもやや小形である。6号墳は遺存部分がかきわめて少なく、側壁は若干胴張り気味であるが判断は下しがたい。従来から

知られている徳島県の後期古墳においては、一つの古墳群を構成する横穴式石室の形態は斉一性が強いことが一つの特徴としてあげられる。群形成の過程で横穴式石室の系統が複数にまたがっているという点は、柿谷遺跡の一つの特異性を示すとともに、古墳をとりまく社会環境をも反映しているものであろう。

小竪穴式石室の構造とその位置づけ

柿谷遺跡における小竪穴式石室は7基を数える(3～9号石室墓)。うち4～9号石室墓は第12調査区において検出された。3号石室墓についても第11調査区の南寄りに位置しており、同一グループとみることも不可能ではない。しかし、構造や古墳との位置関係が異なっており、同一の評価は下せない。したがって、分布状況からは2つのエリアが設定できる。3号石室墓の場合には5号墳・6号墳の墳丘裾に接するか、墳丘内にもぐるこの想定される微妙な位置である。一方、4～9号石室墓は南北10m・東西12mの狭い範囲に集中してみられる。この範囲に隣接する古墳がみられないことから、石室墓のみによる墓域を形成したということができる。

7基の石室墓は構造と規模により、主に2つのグループに分かれる。

3号石室墓は直方体に近い石材の平坦面を内側に向けて積み上げてゆくものである。規模的にも長軸2.3m、短軸1.1mと大形のものである。この構造と規模をもつ石室は今のところ県下では知られていないが、愛媛県伊予郡砥部町長田2号墳の周濠内に築かれた第2号石室は、構造や古墳との位置関係において比較検討の対象となるものである⁽⁴⁾。伸展葬が可能な規模であるが、5号墳・6号墳の墳丘との関係が調査で明らかにできなかったため、その性格付けも充分に行うことはできない。

4～9号石室墓はいずれも板石を立てて基底石とするもので、2段目以上は失われているものの小口積みとなる構造が想定されるものである。平たい円礫を敷き詰めた礫床をもつ。礫床に用いる石材の大小や、礫床を平坦にするための小円礫の充填の有無にある点にやや相違がある。これら6基の中で、9号石室墓については長軸1.84m、短軸0.63mと規模が大きく、墓壇の形状などが異なっており、このグループ内で中心的な存在といえる。大形の9号石室墓を除く5基については、伸展葬が不可能であり再葬墓としての性格を与えうる。

副葬品は6号・7号・9号の各石室墓に須恵器の蓋杯がみられ、武具・農工具・装飾品は認められなかった。

副葬遺物の問題

副葬品の特徴として、その組み合わせの中に武具・馬具・農工具などの鉄製品がきわめて少ない点があげられる。

2号墳…鉄鏃2、轡

3号墳…刀子1

4号墳…鉄鏃7

以上の他に、7号墳の周濠内からは馬具とみられる破片が出土しているが、断片的であり出土状態も安定していないため、その評価を十分にすることができない。

同時期の古墳群について、群単位で行われた調査は現段階では非常に少ない状態である。麻植郡山川町忌部山古墳群⁽⁵⁾、板野郡板野町蓮華谷(II)古墳群⁽⁶⁾、上板町山崎古墳群⁽⁷⁾・山田古墳群A⁽⁸⁾・菖蒲谷西山B遺跡⁽⁹⁾においては、馬具を副葬する古墳が複数に及ぶか、一古墳のみにとどまっても鉄鏃や刀子などの武器・工具を副葬している状況がみられる。このように、馬具や武具の保有率は柿谷遺跡よりかなり高いといえる。

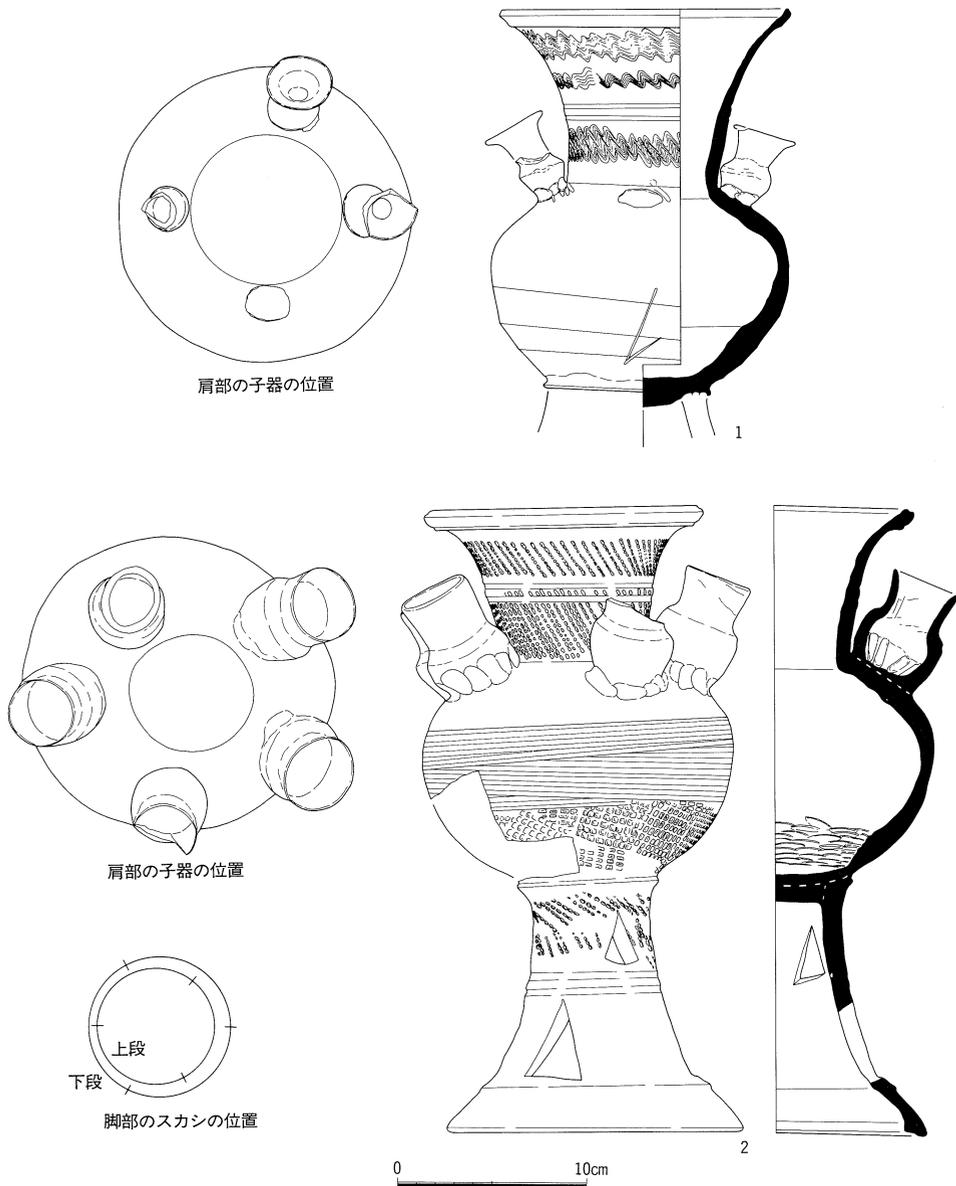
7号墳で出土した須恵器の子持器台は県下で初の出土である。子持器台は山田邦和氏の形式分類でI—2類にあたる⁽¹⁰⁾。この形式は近隣の地域では和歌山・岡山・愛媛に集中しているが、細部の形態においていずれも若干の異動がある。小形で脚部中央部が細くくびれ端部へ向けての開きの少ない形態は類例が乏しく、鳥取県中西尾6号墳、福井県西二つ屋古墳などでみられるに過ぎない。その他の装飾付須恵器全体を見渡しても、台付子持壺が2例知られているに過ぎない。いずれも徳島市国府町西矢野出土で、うち1点は山花古墳出土とされているが、この古墳についての詳細は明らかにされていない。みかん畑などの開墾にともなって出土したと伝えられるものである。いままで写真のみでしか紹介されていなかったこともあり⁽¹¹⁾、今回報告書の刊行に際して実測図の作成を行い、ここに掲載した(第111図)。

2点はいずれも台付壺を親器として、壺部の肩に子器を配するという形態である。山田氏の分類による装飾付壺Ⅲ類に相当する。1は脚部の形状が不明であり、Ⅲ類での細別はできなかったが、Ⅲ—2類になるものとみられる。親器は偏球形の体部から直線的に緩やかに開

番号	部 位	器 高	口 径	体部最大径	頸 部 径	口頸部高
1	親 器	21.2	15.05	15.8	8.05	9.4
	子 器 ①	4.15	3.25	2.75	1.9	1.75
	子 器 ②	—	—	—	—	—
	子 器 ③	(2.55)	—	2.45	1.75	—
	子 器 ④	4.2	3.4	2.65	1.8	2.2
2	親 器	19.8	13.9	16.5	6.6	7.7
	子 器 ①	5.8	3.5	4.2	3.05	2.4
	子 器 ②	(4.9)	—	4.3	2.9	(1.0)
	子 器 ③	5.4	3.7	4.6	3.35	2.6
	子 器 ④	5.75	3.8	4.8	3.3	2.5
子 器 ⑤	5.0	3.6	4.1	3.1	2.3	

く口頸部を有する。口頸部には沈線と櫛描波状文による文様帯が展開する。口縁端部は幅広の突帯がめぐり、この部分の器壁は非常に薄く仕上げられている。子器は壺部

第3表 徳島市国府町出土の装飾は須恵器の子持壺の部分計測値

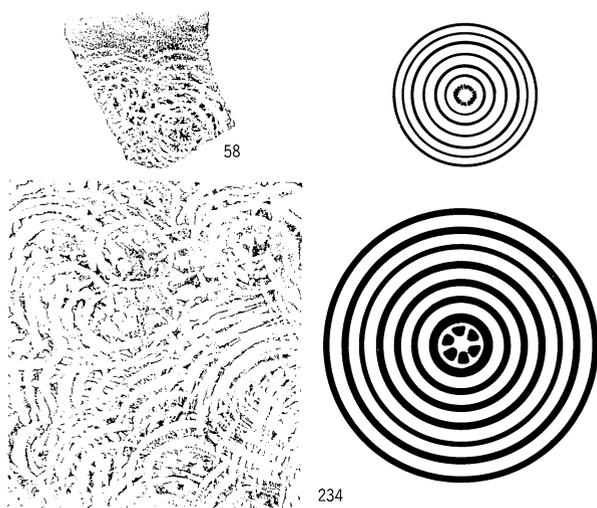


第111図 徳島市国府町出土の装飾付須恵器（1：西矢野出土 2：山花古墳）

の肩に4個体が載るもので、その形態は親器に似て口縁部が外上方へ反る。子器の底部は親器とはつながっていない。親器の体部下半には回転ヘラケズリが施され、「V」字形のヘラ記号がみられる。現存高21.2cmである。2は一部を欠するものの、ほぼ全形が分かるものでIII-2類に相当する。器高33.2cm、脚端径15.1cmを測る。親器の体部はほぼ円形で、口頸部はまっすぐ立ち上がり端部付近で大きく開く。口縁端部にはやや厚みのある突帯がめぐる。下半は外面格子タタキ、内面円形当て具による成形が行われ、体部中半は回転カキメ調整が施される。脚部は直線的に開き段を経て、端部に至る。弱い2条の沈線で区画され、それぞれ

3箇所の三角形透かしを千鳥配列で穿つ。口頸部及び脚部上段には櫛描列点文がめぐる。子器は口頸部が直立するタイプのもので、内面には親器への接合時のへら状工具によるナデの痕跡が明瞭に残る。親器の壺口縁端部や脚部の形態からみると、2点ともに田辺氏の編年におけるTK10～MT85に並行する可能性が高い。

これらの3点の装飾付須恵器の各形式の分布域は伊予・吉備を中心とした瀬戸内海沿岸に広がっており、これらの分布域の一角を占めるものであることは確かである。3点をもって断定は困難であるが、現在のところ徳島県内では6世紀末以降の新しい段階の出土はなく、愛媛・高知では7世紀に至る段階でも装飾付須恵器を多用する点からみると、西四国域とは様相が異なる様相を呈する。



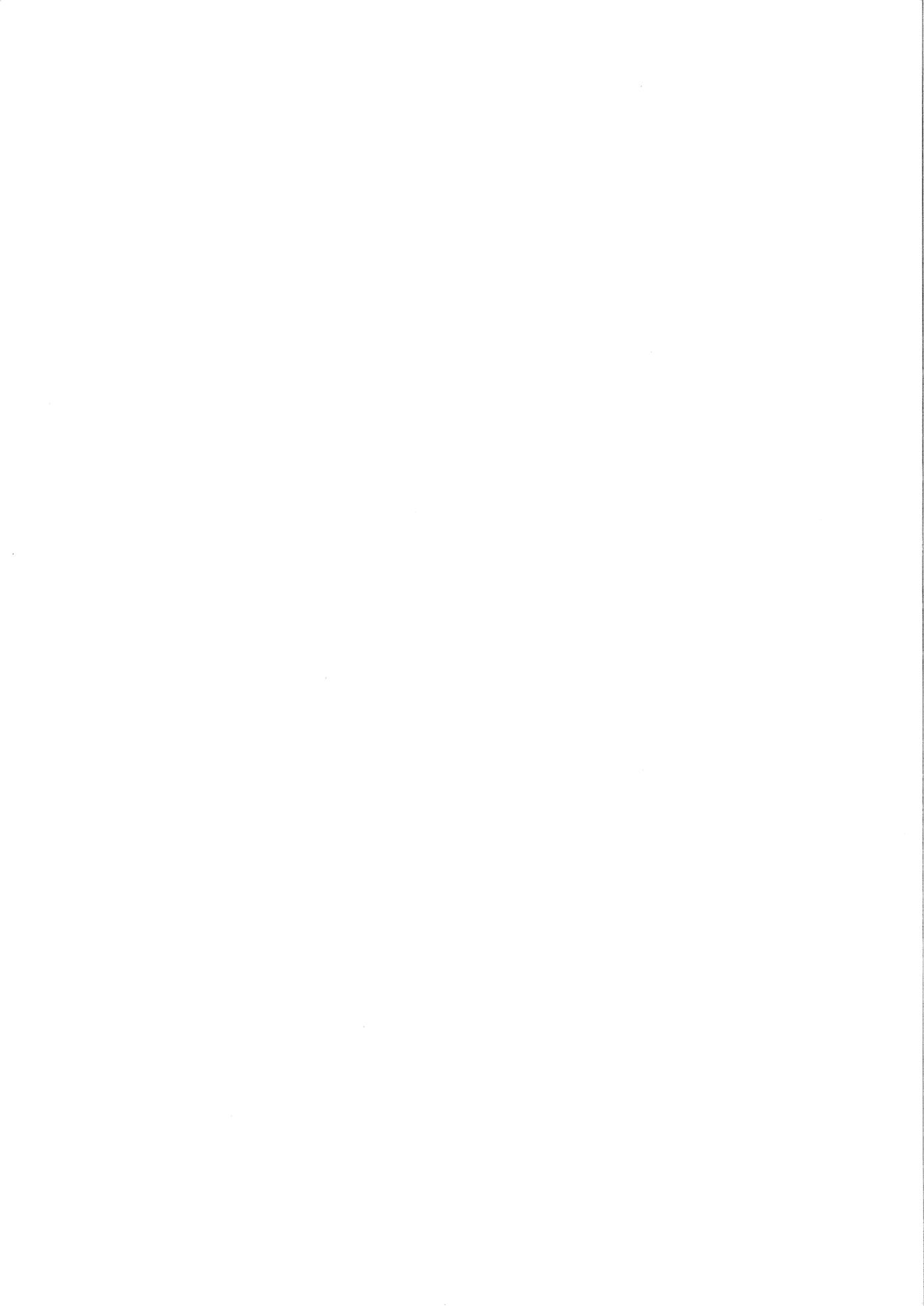
第112図 車輪文の二態 (左:拓本 右:復元模式図) (S=1/3)

7条以上の同心円を刻み、中心部には径1.0cmの範囲に20箇所の細かい刻みをいれる。同心円は幅2mm以下と非常に細い。234は欠損している口頸部を除きほぼ関係に復元された。体部最大径付近においてもっとも当て具痕がよく残っている。径11.0cmの当て具の機能面に7条の同心円を刻む。中心部には径1.5cmの範囲内に6箇所の刻みをいれる。同心円自体も幅3～4mmと広く、車輪文部分の幅も58と比較して長さ・幅とも大きく、別原体によるものであることは明かである。

車輪文叩き目については、横山浩一氏が1981年当時の資料の集成とその起源の問題についてまとめられている⁽¹²⁾。各種の形態の車輪文を取り上げるとともに、その起源が木材の亀裂を祖形とした放射状文様であることを論証された。柿谷遺跡出土の58については、刻みが20箇所もみられ、祖形となる亀裂からは大きくかけ離れているといえる。また、横山氏の論考を受けた西口寿生氏も車輪文が須恵器工人の問題にまで及ぶという見方を示している。横山氏の集成以後もわずかつづ資料が増加しているものの⁽¹³⁾、系統的な検討は行われていない。研究者の関心が薄いためかとも思われるが、資料の着実な蓄積が望まれるところである。

注

- (1) 「旧石器時代」『香川県史 1 原始・古代』香川県 1988
- (2) 「金蔵～上井遺跡」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 1』徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター・日本道路公団 1993
- (3) 藤川智之「須恵器からみた徳島県後期古墳の一側面」『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要 真朱』徳島県埋蔵文化財センター 1992
- (4) 「長田遺跡」『一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』愛媛県埋蔵文化財調査センター 1981
- (5) 『古墳時代の徳島市』徳島市教育委員会 1981
- (6) 『忌部山古墳群』徳島県博物館 1983
- (7) 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 』(徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター・日本道路公団 1994) 所収
- (8) 「山崎古墳群」『掘ったでよ阿波』徳島県教育委員会・徳島県郷土文化会館、1988
- (9) 本報告書所収
- (10) 本報告書所収
- (11) 山田邦和「装飾付須恵器総覧—装飾付須恵器の基礎的研究 3—」『古代学研究所研究紀要』第2輯 1992年
- (12) 横山浩一「須恵器に見える車輪文叩き目の起源」『九州文化史研究所紀要』第26号、九州大学九州文化史研究施設 1981
- (13) 『陶邑Ⅱ』大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1980



遺物觀察表

第4表 第1～第3調査区出土石鏃計測表

(単位mm)

番号	挿図	図版	形式	石材	全長	幅	厚み	重量(g)
5	8	4	凹基無茎	サヌカイト	22.00	15.30	4.50	0.81

第5表 第1～第3調査区出土土器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
6 9	6区包 含層	杯	口径 10.5 受部 13.0 立上 0.55	内傾する短い立ち上がり 杯部に短い脚部がつく。 立ち上がり内面の屈曲は弱い。	残存部位は回転ナデ調整。	(外)青灰色 (内)暗青灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	不明	
7 9	6区包 含層	高杯	口径 11.45 脚端 8.85 受部 13.75 立上 0.6	短い立ち上りを有する 杯部に短い脚部がつく。 杯部は半球形で、立ち上 がりは直線的に内傾し、 端部はやや尖り気味にお さまる。脚部は端部に向 けて八の字状に大きく開 き端部は上下に拡張し、 いずれも角ばっておさま る。	杯底部外面は回転ヘラ削 り後、脚部接合時に回転 ナデ。その他は回転ナデ 調整。	(杯部・脚部外 面)青灰色・暗 青灰色 (内)青灰色	密、径1mm未 満の砂粒少し 含む	良好	時計回り	
8 9	6区包 含層	平瓶 口縁部	口径 6.1 頸部 5.0	頸部より緩やかな角度で 開く平瓶の口縁部片。端 部は丸くおさまる。中位 外面に接合痕が明瞭に観 察できる。	残存部位は回転ナデ調整。	(外)灰白色 (内)灰黄色	密、径2mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	不明	
9 9 4	6区包 含層	広口壺	口径 13.4	明確な屈曲をもたない頸 部から徐々に外側へ開く 口縁部へつながる。端部 は外面が大きく肥厚し、 丸くおさまる。頸部から 口縁部にかけて、粘土紐 の接合痕を明瞭に残す。	体部内面は同心円文タタ キ目、その他の残存部位 は回転ナデ調整。	暗青灰色	密、径2mm未 満の砂粒やや 多く含む	良好	不明	
10 9 4	6区包 含層	甕 口縁部	口径 21.65	頸部より緩やかに外反す る口縁部。端部付近で外 面に肥厚がみられ、平坦 面をもつ。内面はナデに よる凹凸が目立つ。頸部 内面に接合痕あり。	残存部位は回転ナデ調整。	(外)暗灰色 (内)灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	不明	

第6表 SM1001石室内出土土器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
11 18 11		逆転杯	口径 11.8 器高 4.6	緩やかな丸みをもつ杯。 口縁部は内湾気味で、内 面が肥厚する。	底部外面は回転ヘラ切り 後ナデ調整。その他は回 転ナデ調整。	灰白色	精良	良好	不明	
12 18 11		杯蓋	口径 12.0 器高 4.05	丸みを帯びた器形をもつ 杯蓋。天井部の丸みのま ま口縁部にいたり、端部 は丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ切 り後、回転ヘラケズリ。 その他は回転ナデ調整。	(外)暗青灰色 ・青灰色 (内)暗青灰色	径2～4mmの 砂粒を含み、 径0.5mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	時計回り	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
13 18		杯蓋	口径 12.7	丸みを帯びた器形を有する杯蓋の口縁部片。緩やかなカーブのまま丸く端部がおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)灰色・灰白色 (内)灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒少し含む	やや軟質	反時計回り	
14 18 11		杯蓋	口径 12.0 器高 3.8	天井部がやや平坦な形態で、口縁部に向かって緩やかにカーブする。端部ではわずかに外反し、丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り後、無調整。その他は回転ナデ。	青灰色・明緑灰色	精良	やや軟質	時計回り	
15 18 11		杯蓋	口径 11.5	緩やかなカーブから直立する口縁部にいたる。端部は内面が肥厚し、丸くおさまる。ナデによる凹凸が顕著である。	残存部位は回転ナデ調整。口縁部内面には特に強いナデ。	灰色	精良	良好	不明	
16 18 11		杯蓋	口径 10.85	丸みを帯びた天井部をもつと考えられる杯蓋片。全体に器壁は薄いつくりとなっている。ナデによる凹凸が著しく、端部は丸くおさまる。	残存部位は回転ナデ調整。	灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	
17 18 11		杯蓋	口径 10.8 器高 3.6	口径に比して器高の高い器形。内面に成形時の凹凸をよく残す。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	暗赤灰色	密、径2mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
18 18 11		杯蓋	口径 11.2 器高 1.8	偏平な器形で、天井部に宝珠形のみがつくが欠損している。かえりは内傾し、口縁以下へ下がっていない。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。天井部内面は回転ナデ後一定方向ナデ。	(外)灰白色・暗青灰色 (内)灰色	精良	良好	時計回り	
19 18 11		杯蓋	口径 11.2 器高 2.65	全体の器形・宝珠形のみと共に偏平な杯蓋。かえりは短く内傾する。かえり・口縁はいずれも端部を丸くおさめる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色	密、径2mm未満の砂粒少し含む	やや軟質	時計回り	
20 18 11		杯蓋	口径 9.9 器高 2.25	偏平な器形で、天井部にやや偏平なつまみを付す。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色	精良	やや軟質	時計回り	
21 18 11		杯蓋	口径 9.2 器高 2.8	偏平な器形で、天井部に宝珠形のみを付す。口縁内部のかえりはなく、また屈曲も弱い。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色	精良	良好	時計回り	
22 18 11		杯蓋		極めて偏平な器形に偏平な算盤玉形のみを付す。非常に緩やかなカーブをもち、口縁部付近で下方へ折れ曲がる。器壁には成形時のナデの痕跡を明瞭に残す。	天井部外面の1/2は回転ヘラ削り、その他の部位は回転ナデ調整。	灰白色	精良	軟質	時計回り	
23 18 11		杯	口径 9.1 器高 3.35 受部 11.1 立上 0.45	やや平たい底をもつ小形の杯。立ち上がりは直線的に内傾し短い。内面の屈曲はやや強い。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。底部内面は回転ナデ調整後、一定方向ナデ。	暗青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	時計回り	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
24 18 11		杯	口径 9.3 器高 3.3 受部 11.2 立上 0.3	器高・口径とも小形の器形。立ち上がりは短く内傾しており、内面の屈曲は弱い。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。底部内面は回転ナデ後一定方向ナデ。ヘラ切りの痕跡よく残す。	暗緑灰色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	ヘラ記号
25 18		杯	口径 10.9 器高 3.55 受部 12.65 立上 0.15	器高に比して短い立ち上りを有する杯。立ち上がりは内傾し、端部は尖り気味におさまる。内面の屈曲は弱く、粘土の接合痕明瞭。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	青灰色・灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒やや多く含む	良好	反時計回り	
26 18		杯	口径 8.85 器高 3.4 受部 10.75 立上 0.4	口径・器高とも小形の杯身。立ち上がりは内傾し、尖り気味におさまる。内面にはナデが施されているため、屈曲はない。	底部外面は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り。その他の部位は回転ナデで、底部内面は回転ナデ後一定方向ナデ。	青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	時計回り	ヘラ記号？
27 18 11		杯	口径 9.15 器高 3.3 受部 11.25 立上 0.4	口径・器高とも小形の杯身。立ち上がりは内傾した後、上方へ反り尖り気味におさまる。内面の屈曲はやや強い。	底部外面はヘラオコシの痕跡を残し、回転ヘラ削りは施されていない。その他の部位は回転ナデ調整で、底部内面は回転ナデ後、一定方向ナデ。	暗青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	時計回り	
28 18	第2機 床上面	杯	口径 9.3 受部 11.3 立上 0.4	口径・器高とも小形の杯身。立ち上がりは内傾し、丸くおさまる。内面の屈曲は弱い。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	暗青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	
29 18 11		杯	口径 9.7 器高 3.5	平底に外方へまっすぐ立ち上がる口縁がつく。口縁端部は丸くおさめている。	底部外面は回転ヘラ切り後、ナデ調整。その他は回転ナデ調整。底部内面は回転ナデ後一定方向ナデ。	暗青灰色	密、径1mm未満の砂粒やや多く含む	良好	時計回り	
30 18 11		土師器 高杯		杯底部から直線的に開く脚柱をもつ。杯底部と脚部との接合部は入念に補強されている。	残存部位はナデ調整。	にぶい黄褐色	密、径2mm未満の砂粒やや多く含む	やや軟質		
31 18 11		杯	口径 8.9 器高 3.65	丸みをもつ器形の杯で、口縁部はわずかに外反している。口縁部の器壁が2~4mmと薄く仕上げられている。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。その他は回転ナデ調整。	(外)淡黄色 (内)灰白色	精良	やや軟質	不明	
32 18		杯	口径 9.2 器高 3.95	やや丸い底からそのまま立ち上がって口縁にいたる器形。体部中半にごくわずかな屈曲がある。	底部外面はヘラ切り後ナデ調整。その他は回転ナデ調整。	灰白色	精良	軟質	時計回り	

番号 挿図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
33 18 11	石室内	杯	口径 11.1 器高 3.4	緩やかな丸みをもつ杯。 口縁部はわずかに内湾気 味で、端部は丸くおさま る。	底部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。	青灰色	密、径2mm未 満の砂粒ごく わずかに含む	良好	時計回り	
34 18 11	石室前 落込	無蓋高 杯	口径 12.45 器高 6.75 脚端 9.1	非常に浅い皿形の杯部に 八の字状に開く脚部を付 す。杯部は緩やかなカー ブで立ち上がり、丸くお さまる。脚部は末広がり で、端部付近で大きく開 き下方へ折れ曲がり、端 部はやや尖り気味であ る。	杯底部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。脚部と杯部の接合部 は粘土を丁寧にナデいて いる。	灰白色	やや粗、径1 mm未満の砂粒 やや多く含む	やや軟質	反時計回 り	
35 18 11		無蓋高 杯	口径 13.85	無蓋高杯の杯部片で、本 来は扁平な器形であった が歪みが著しい。	底部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。	青灰色	密、径1mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	時計回り	
36 18 11		平瓶	口径 5.8 器高 11.5 最大 14.65 頸部 3.8	扁平な球形の平瓶で、上 面はやや平坦である。体 部最大形は上位1/3にあ り、肩の張りはやや強い。	体部上部外面は回転カキ メ後、回転ナデ調整。そ の他の残存部位は回転ナ デ調整。体部内面中央部 に粘土の円盤充填の痕 跡。	(外)灰白色・ 暗灰色 (内)灰白色	密、径0.5mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	不明	
37 18	義道部 攪乱	壺	口径 25.0 頸部 21.1	明確な屈曲をもつ頸部か ら外上方へわずかに外反 して伸びる口縁部。口縁 端部外面は肥厚している が、突帯の退化であろう。 上面に端面を作り出し、 端部は内外面とも肥厚し おさまる。	体部内面は同心円文タタ キの可能性はある。その 他の残存部位は回転ナデ 調整。	灰白色	密、径0.5mm未 満の砂粒ごく わずかに含む	良好	不明	
38 18		土師器 杯	口径 12.25	浅い皿形をもち、緩やか なカーブで立ち上がり、 やや尖り気味におさま る。	器表は内外面とも摩滅が 著しいが、内面は平滑に 調整され、幅1mmの暗文 が約2mm間隔に施されて いる。	(外)暗赤褐色・ 黒色 (内)暗赤褐色	精良	軟質		
39 18 11		土師器 杯	口径 12.0	緩やかなカーブの器形を もつ口縁部片。端部には 内外面のナデにより、弱 い沈線が巡る。	底部外面は静止ヘラ削 り、その他はナデ調整。 体部内面は幅2.5mmの原 体幅をもつ放射状暗文。	橙色	精良	やや軟質		
40 18		弥生土 器 底部	脚端 5.95	底面をやや上げ底にし、 ドーナツ底とし、外上方 へまっすぐ立ち上がる体 部を有する。	摩耗により観察不可。	(外)にぶい橙 色 (内)にぶい黄 橙色	密、径1mm未 満の石英、長 石などをやや 多く含む	軟質		
41 18		弥生土 器 底部	脚端 7.0	底部をやや上げ底にする 弥生土器の底部。体部は 外上方へまっすぐ立ち上 がる。	底部外面はユビオサエ、 その他の部位は調整不 明。	にぶい黄褐色	密、径2mm未 満の石英、長 石多く含む	やや軟質		

第7表 SM1001出土耳環計測表

(単位mm)

番号	縦径	横径	幅	厚	重さ(g)	材質	技法
44	17.40	19.50	4.80	6.15	4.04	銅地銀	中実

第8表 SM1001出土勾玉計測表

(単位mm)

番号	材質	A	B	C	D	E	F	重量(g)
43	ヒスイ	20.10	14.90	8.80	9.70	2.20	3.20	5.35

第9表 SM1001出土平玉計測表

(単位mm)

番号	材質	径	高さ	上面径	下面径	上孔径	下孔径	重量(g)
44	不明	16.50	11.90	13.10	13.00	4.20	4.20	3.11

第10表 SM1001周濠出土土器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
45 19 11	周濠	杯蓋	口径 10.3 器高 3.9	丸みを帯びた器形をもつ杯蓋。緩やかなカーブで口縁部にいたり、わずかに外反し端部は丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	明赤灰色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
46 19	周濠	杯蓋	口径 11.75 器高 3.25	偏平で丸みを帯びた器形の杯蓋。緩やかなカーブで口縁部にいたり、端部内面がわずかに肥厚し丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	暗青灰色	密、径2～5mmの砂粒をわずかに含む、0.5mm未満の砂粒多く含む	良好	反時計回り	

第11表 SD1002・3出土土器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
47 26	上層	杯蓋	口径 14.05	やや偏平な器形をもつ杯蓋口縁部片。口縁部はわずかに外反し、端部はやや尖り気味におさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)黄灰色 (内)灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒少し含む	良好	時計回り	
48 26		杯蓋	口径 14.25	緩やかなカーブをもつ杯蓋口縁部片。口縁端部内面には退化の進んだ沈線が巡り、丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)暗赤灰色 (内)明紫灰色	密、径1mm未満の砂粒多く含む	良好	不明	
49 26	1区	杯蓋	口径 11.45	偏平な器形をもつと考えられる杯蓋の口縁部片。下方へ折れ曲がった口縁部は、やや尖り気味におさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色・灰色	精良	良好	不明	
50 26	上層	杯	口径 9.3 受部 11.9 立上 0.65	小形の杯身の受け部以上の破片。立ち上がりは内傾後、上方へ反り、端部は尖っている。内面の屈曲は弱い。	残存部位は回転ナデ。	灰色	密、径0.5mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	不明	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
51 26	上層	杯	口径 12.9 受部 15.9 立上 0.65	器高に比してやや口径が 大きく復元される杯口縁 部片。立ち上がりは直線 的に内傾する。端部はや や尖り気味におさまる。	残存部位は回転ナデ調 整。	暗青灰色	精良	良好	不明	
52 26		高杯		脚柱と杯部への接合部分 のみの遺存。下方で端部 に向けて八の字状に開く と考えられる。中半に弱 い沈線が2条巡り、うち 1条は図化が不可なほど に弱い。下半に1条の沈 線が巡る。スリット状の 透しが上下2段、2方向 に穿たれる。	杯底部外面は回転ヘラ削 り、その他の残存部位は 回転ナデ調整。	青灰色、暗青 灰色	密、径1mm未 満の砂粒少し 含む	良好	時計回り	
53 26	1区	高杯		下方へ八の字状に大きく 開く脚部で、杯部・脚端 部はいずれも欠損してい る。長方形透しを2段2 方向に穿つ。中半に1条 の沈線を巡らせし、さら に下方には退化した沈線 の名残を伴う。	残存部位は回転ナデ調 整。	灰色	密、径1mm未 満の砂粒少し 含む	良好	不明	
54 26 16	3区	甌	最大 8.5 頸部 3.8	やや偏平な球形の体部を もつ甌片で、細くくびれ て屈曲する口頸部は欠損 している。体部上半1/ 3に弱い沈線を1条巡ら す。体部最大頸部分円孔 は欠損している。	体部下半1/3は静止ヘ ラ削り、その他の残存部 位は回転ナデ調整。頸部 内面に、体部と口頸部接 合時の絞りの痕跡。	(外)青灰色・ 暗青灰色 (内)暗青灰色	密、径1mm未 満の砂粒わず かに含む	良好		
55 26 16	褐色粘 質土	甌	最大 10.6 頸部 3.3	丸い壺部に細い頸部をも ち、口頸部の大半が欠損 している。壺部は下半が 球形で上半は直線的であ る。円孔をやや上位に穿 ち、肩部に2状の弱い沈 線を巡らせる。頸部にも 弱い沈線が1条巡る。	壺部下半は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。	青灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	反時計回 り	
56 26 16	9区	平瓶	最大 16.6	偏平な体部をもち、口縁 部を欠損している平瓶 片。体部最大径はやや上 位にもち、肩の張りは強 い。底部は平底状を呈し ている。	体部外面は静止ヘラ削 り、体部の底部外面は回 転ヘラ切り後、ナデ調整。 その他の残存部位は回転 ナデ調整。	灰白色・灰色	密、径1mm未 満の砂粒ごく わずかに含む	良好	不明	
57 26	1区	壺	口径 16.6 頸部 14.7	外側へまっすぐ伸びる壺 の口縁部片。端部外面が 肥厚し、端部はわずかに 上方へ拡張し、丸くおさ まる。	残存部位は回転ナデ調 整。	灰色	径0.5mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	不明	
58 26 16	9区	甌	口径 23.5 頸部 20.3	頸部からまっすぐ外側へ 伸びる甌の口縁部片。口 縁端部外面に鋭角的では ないものの断面三角形の 突帯を巡らし、端部はそ のまま丸くおさまる。	体部外面は平行タタキ 後、回転カキメ調整。体 部内面は同心円タタキ。 その他の残存部位は回転 ナデ調整。	褐灰色・黒褐 色	密、径2mm未 満の砂粒やや 多く含む	良好	不明	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
59 26 16		甕	口径 21.9 頸部 18.15	頸部より外上方へまっすぐ開く甕の口縁部。口縁部は端部外面に幅2cmの幅広の突帯を巡らし、内面には強いナデによる凹線が巡る。端部はやや角ばっておさまる。体部は肩の張りが弱く、器壁は0.8cmである。	体部外面はタテ方向の平行タタキ目の後、回転カキメ調整。内面は車輪文同心円タタキ。中心部の幅は20条ある。その他の残存部位は回転ナデ調整。	青灰色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
60 26 16	9区	甕	口径 23.9 頸部 19.5	頸部付近では直立し、外側へ徐々に開く甕の口縁部片。口縁端部は外面に肥厚し端面をつくる。さらに上方へつまみ上げられ、丸おさまる。口縁部外面の端面には5~6条/1.7cmのハケ状工具を原体とする刺突がみられる。	体部外面は平行タタキ後、回転カキメ調整。体部内面は同心円タタキ後、頸部内面には強い回転ナデ調整。その他の残存部位は回転ナデ調整。	(外)灰色 (内)オリーブ 黒色	密、径1mm未満の砂粒やや多く含む	良好	不明	
61 26 16	9区	甕	口径 25.85 頸部 20.8	頸部からまっすぐ外側へ伸びる甕の口縁部片。口縁端部外面に幅2.2cmの幅広の突帯を巡らせる。	体部外面は平行タタキ、内面は同心円タタキ。その他の残存部位は回転ナデ調整。	暗青灰色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	
62 26 16	1区	甕	口径 29.5 頸部 25.8	頸部付近で直立し、緩やかに外反する甕の口縁部片。口縁端部外面に幅2.3cmの幅広の突帯を巡らし、端部はやや内面につまみ上げられて丸くおさまる。	残存部位は回転ナデ調整。	灰色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	
63 26	3区	弥生土器 底部		ドーナツ底状の上げ底をもつ弥生土器の底部片。体部は上方へ伸びるものと考えられる。	摩滅が著しいため、観察不可。	明黄褐色	密、径2mmの石英・長石を多く含む	軟質		
64 26 16		弥生土器 底部	脚端 7.8	底部をベタ底とし、直線に立ち上がる体部を有する。底部付近での器壁の厚みは10mmを越える。	体部外面はタテナデ、内面はタテ方向のヘラ削り。体部と底部の接合部分はユビオサエが見える。	(外)にぶい橙 色 (外)にぶい黄 橙色	密、径4mm未満の砂粒多く含むほか、結晶片岩を含む	やや軟質		

第12表 SD1002・1003出土石鏃計測表

(単位mm)

番号	挿図	図版	形 式	石 材	全長	幅	厚み	重量 (g)
65	27	16	円基	サヌカイト	22.20	14.00	3.00	1.11
66	27	16	平基無莖	サヌカイト	24.85	15.70	3.80	1.19
67	27	16	凹基無莖	サヌカイト	27.60	16.45	2.55	1.05

第13表 SD1002・1003出土ガラス玉計測表

(単位mm)

番号	径	厚 み	孔 径	重 量 (g)	色 調
70	6.275	4.00	2.2	0.21	サファイアブルー

(単位mm)

番号	径	厚み	孔径	重さ (g)	色調
71	6.0	4.0	1.4	0.23	シアンブルー
72	5.875	4.0	2.5	0.22	ブルシアンブルー
73	5.4	3.2	1.4	0.11	コバルトブルー
74	5.35	3.85	2.3	0.16	ブックウィング
75	4.2	2.65	1.4	0.06	ベニスグリーン

第14表 第4～第9調査区出土土器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
76 29 16	3区包 含層	杯蓋	口径 12.35 器高 3.55	やや偏平で丸みを帯びる器形をもつ杯蓋片。口縁は約5mmと器壁が厚く、端部は丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他の残存部位は回転ナデ調整。	青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	時計回り	
77 29	5区包 含層	杯蓋	口径 14.4	偏平な器形の杯蓋口縁部片。かえりは短く、断面三角形の突帯状をなし、内側に強い屈曲がある。口縁端部は外側に端面をもち、わずかに下方へ拡張する。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)灰色 (内)暗灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
78 29	5区包 含層	杯	口径 10.75 受部 13.1 立上 0.35	短い立ち上がりをもつ杯の口縁部片。立ち上がりは内傾しわずかに上方へ反る。端部はやや尖り気味におさまる、内面の屈曲はやや強い。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
79 29 16	5区包 含層	杯	口径 12.2 受部 14.95 立上 0.25	短い立ち上がりをもつ口縁部受け部以上の破片。受け部にはナデによる端面をもつ。端部は尖り気味で、内面の屈曲は弱い。	残存部位は回転ナデ。	暗青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	
80 29 16	8区包 含層	杯	口径 10.5 受部 13.2 立上 0.7	口径に比してやや大きめで厚手の受け部をもつ。立ち上がりは内傾し、内面の屈曲はやや強い。	残存部位は回転ナデ調整。	暗青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒少し含む	良好	時計回り	
81 29 16	6区包 含層	杯	口径 13.7 器高 3.85 受部 16.0 立上 0.6	器高に比してやや大形の口径をもち、短い立ち上がりを有する杯身片。立ち上がりは内傾し、やや尖り気味におさまる。口縁端部及び受け部の端部は比較的シャープなつくりである。	底部外面は回転ヘラ削り、その他の残存部位は回転ナデ調整。	(外)灰色・黒色 (内)灰色・暗灰色	やや粗、径2mm未満の砂粒非常に多く含む	良好	反時計回り	
82 29	5区包 含層	杯	口径 12.65 受部 14.75 立上 0.65	水平に近い角度の受け部をもち、内傾する立ち上がりはやや尖り気味におさまる。	残存部位は回転ナデ調整。	灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
83 29 16	8区包 合層	高杯脚 部	脚端 11.8	端部へ向けての八の字状に大きく開く高杯の脚部片。中半には弱い沈線を2条区画として巡らせ、その上下にスリット状の透しを2方向に穿つ。脚端部付近は水平となつて、下方へ拡張して、やや尖り気味におさまる。	残存部位は回転ナデ調整。脚柱部内面には杯部への接合時の絞りの痕跡。	(外)青灰色 (内)青灰色・ 暗青灰色	密、径2mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	
84 29		弥生土 器 甕	口径 19.5 頸部 18.8	頸部で弱く屈曲し、口縁端部に向けて緩やかに広がる。端部は丸くおさまる。	摩耗により観察不可。	橙色	密、径4mm未満の石英、長石非常に多く含む	軟質		

第15表 第4～第9調査区出土石鏃計測表

(単位mm)

番号 挿図 図版	挿図	図版	形 式	石 材	全長	幅	厚み	重量 (g)
89	31	17	五角形	サヌカイト	17.90	13.90	2.25	0.60
90	31	17	凹基無茎	サヌカイト	11.40	11.20	2.30	0.24
91	31	17	凹基無茎	サヌカイト	16.35	15.45	3.80	0.56
92	31	17	凹基無茎	サヌカイト	18.15	15.60	5.05	0.73
93	31	17	凹基無茎	サヌカイト	27.15	17.50	3.85	1.78
94	31	17	凹基無茎	サヌカイト	27.00	17.60	4.30	2.18
95	31	17	凹基無茎	サヌカイト	22.75	23.00	4.85	2.71
96	31	17	凸基無茎?	サヌカイト	36.00	17.00	5.70	3.80
97	31	17	凸基無茎	サヌカイト	39.40	13.50	3.65	2.26

第16表 SM1002出土土器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
99 36		土師器 高杯		円柱状の脚部に杯部がつく。口縁及び脚端部は欠損している。杯部は直線的に大きく開く。脚部は下半1/3で大きく八の字状に開くものと考えられる。	杯部外面は細かいハケ(26条/17mm)による調整後、脚部との接合部は丁寧なナデ調整。脚部内面はヘラ状工具による調整。	灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒少し含む	やや軟質	不明	
100 36 20		土師器 高杯		円柱状の脚部に杯部がつく。口縁及び脚端部は欠損している。脚部は下半1/3で大きく八の字状に開くものと考えられる。	脚部を成形した後に杯部を接合し、さらに杯底部内面より粘土を充填し、補強整形を行っている。脚部は外面が板ナデ調整、内面はヘラナデ調整。杯部は遺存状況が悪く観察不可。	灰白色	やや粗、赤色粒及び径1mm未満の砂粒やや多く含む	軟質	不明	
101 36 20		杯蓋	口径 13.7	丸みを帯びる器形で、緩やかなカーブで口縁にいたる。端部は丸くおさまる。	残存部位は回転ナデ。	灰白色	密、径1mm未満の砂粒やや多く含む	良好	不明	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
102 36 20		平瓶	器高 15.5 最大 16.7 頸部 3.8	偏球形の壺部に短く外反する口縁部をもつ。壺部の天井部は緩やかなカーブとなっている。口縁部は中心部よりややはずれた箇所につけられ、外上方へ伸びる。	壺部下半1/3と上半2/3は別の作業単位による回転カキメ。その他は回転ナデ調整。壺部を円盤充填でいったん塞いだ後、口縁部を付し、接合部を丁寧にナデている。	(外)暗オリーブ・灰色・灰白色 (内)赤灰色	密、径2mm未満の砂粒少し含む	良好	時計回り	

第17表 SM1002出土鉄鍬計測表

(単位cm)

番号	出土古墳	出土位置	型 式	全 長	鍬身部長	鍬身部幅	鍬身部厚	茎部長	茎部幅	茎部厚
103	SM1002		平造方頭式	—	6.65	3.3	0.4	—	0.5	0.4
104	SM1002		平造方頭式	—	6.8	2.8	0.35	—	0.65	0.35

第18表 SM1003石室内出土土器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
114 47		杯蓋	口径 14.6 器高 4.45	全体に丸みを帯びた器形で緩やかに口端部にいたる。口縁は内湾せず、そのままのカーブで丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	青灰色	やや粗、径2mm未満の砂粒やや多く含む	良好	時計回り	
115 47	墳丘北東・閉塞中	杯蓋	口径 13.2	丸みを帯びる器形の杯蓋で、全体に器壁が薄い。口縁端部はやや尖り気味におさまる。	残存部位は回転ナデ。	灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒少し含む	やや軟質	不明	
116 47 26		杯蓋	口径 9.85 器高 3.85	肩に弱い屈曲のある杯蓋。全体に薄いつくりになっており、2mmとなる箇所もある。口縁はやや外反気味で、端部はやや尖り気味におさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰色	密、径2mm未満の砂粒多く含む	良好	時計回り	
117 47 26		杯	口径 9.0 器高 3.45	平坦な底部から緩やかなカーブのまま口縁にいたる。端部は丸くおさまる。	底部外面は回転ヘラ削り後、ナデ調整。その他は回転ナデ調整で、底部内面は回転ナデ後一定方向ナデ。	明青灰色	密、径1～3mm未満の砂粒わずかに含む	良好	反時計回り	
118 47 26		杯蓋	口径 7.15 器高 2.7 受部 8.9 立上 0.2	偏平な器形で、天井部やや偏平なつまみを付す。かえりは直立し、内面に明瞭な屈曲がある。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)黒色・灰白色・紫灰色 (内)暗紫灰色	やや粗、3mm未満の砂粒非常に多く含む	良好	時計回り	
119 47 26		杯蓋	口径 8.7 器高 3.25 受部 10.45 立上 0.25	偏平な器形で、天井部にやや偏平な宝珠形のつまみを付す。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	暗青灰色	やや粗、径2mm未満の砂粒やや多く含む	良好	時計回り	

番号 挿図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
120 47 26	石 敷 P-2	杯蓋	口径 11.5 器高 2.85	全体の器形・つまみ共に偏平な杯蓋。かえりは短く断面三角形で、内傾している。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色・暗灰色	密、径0.5mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	時計回り	溶着物あり
121 47 26	墳丘北 東ほか	杯蓋	口径 16.2	非常に偏平な器形で、かえりをもたず偏平なつまみが剥がれ落ちた痕跡をもつ。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	明青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
122 47	羨道部 1次閉 塞中	杯	口径 9.9 器高 3.4	丸みを帯びた器形から緩やかなカーブで口縁部にいたる。口縁はごくわずかに外反し、端部は丸くおさめる。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	明緑灰色	密、径0.5mm未満の砂粒少し含む	良好	時計回り	
123 47 26		無蓋高 杯	口径 14.0 器高 9.7 脚端 9.15	浅い皿形の杯部に脚部を付す無蓋高杯。緩やかなカーブのまま口縁にいたり、端部は丸くおさめる。	杯底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色、黒褐色	やや粗、径1mm未満の砂粒やや多く含む	軟質	時計回り	
124 47 26		無蓋高 杯	口径 15.9 器高 7.9 脚端 9.65	受け部をもたない皿形の杯部に八の字状に大きく開く脚部をつける。杯部は偏平で緩やかなカーブのまま口縁に至り、端部は丸くおさめる。脚部は短い筒状で下半で大きく開く。端部は上下に拡張している。	杯部下半外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。ヘラ削り部分もナデ調整が施されている。	(外)青灰色 (内)暗青灰色・青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	時計回り	
125 47 26		無蓋高 杯	口径 14.85 器高 8.5	浅い皿形の杯部に脚部を付す無蓋高杯で、杯部の歪み著しい。緩やかなカーブのまま口縁にいたり、端部は丸くおさめる。脚部は比較的短く、八の字状に大きく開くものであろう。	杯底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	青灰色	やや粗、径4mmの砂粒を含み、径1mm未満の砂粒やや多く含む	良好	時計回り	
126 47 26		無蓋高 杯	口径 15.1 器高 10.15 脚端 11.6	浅い皿形の杯部に脚部を付す。杯部は緩やかなカーブで口縁部にいたり、端部はそのまま丸くおさめる。脚部は円柱状で1条の弱い沈線を経て端部に向けて大きく、八の字状に開く。端部は上下に拡張し、短面には凹線が巡る。	杯底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒やや多く含む	良好	反時計回り	
127 47 26	羨道部 周濠	平瓶	最大 18.9	偏球形の体部をもつ平瓶片。上面は緩やかなドーム状。下面は平底状を呈し、最大径部分は中半よりやや上位にある。	体部外面下半は回転ヘラ削り、上面は回転カキメ、その他は回転ナデ調整。上面中央部の内面には粘土の円盤充填の痕跡。	青灰色	密、径2mm未満の砂粒やや多く含む	良好	時計回り	
128 47	2次閉 塞	平瓶	最大 12.35 頸部 3.5	偏球形の体部に短く外反する口縁部を付す。体部は天井部・底部共に丸みを帯びる形態。口縁部は端部が欠損しているが、頸部に強いナデによる屈曲がある。	体部下半1/3に回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)灰白色・灰色 (内)灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	

番号 挿図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
129 47 26		甌	口径 9.9 器高 13.0 最大 8.85 頸部 2.45	算盤形の壺部に大きく上方へ開く口頸部とから成る。壺部は上半1/3に最大径をもち、肩部に沈線を施している。最大径部分には斜め下方への穿孔があり、粘土塊が壺部に残っている。口頸部は壺部との接合箇所が特に細くくびれ上半で朝顔状に大きく開く。頸部中半と口縁部と頸部との境目に各1上の沈線が巡る。	壺部下半外面は静止ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外) 暗青灰色・青灰色、 (内) 暗青灰色	やや粗、径2mm未満の砂粒やや多く含む	良好	不明	
130 47 26	閉塞中	甌	口径 13.3 頸部 13.4	体部上半以上が遺存する甕である。半球形の体部に、口径が小さい口頸部がつく。口頸部はわずかに外反するもののほぼ直立し、端部内面において大きく肥厚し、端面をもつ。頸部直下の肩部の円形浮文は、全周で4箇所につくものと考えられる。	体部外面は擬格子タタキ後、回転カキメ調整。体部内面は同心円文タタキ。口頸部内外面は回転ナデ調整。	明青灰色	密、径1mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	反時計回り	
131 47		土師器 杯	口径 16.3 器高 6.6	半球形のやや深い器形をもつ土師器杯。緩やかなカーブで立ち上がり、口縁にいたる。口縁部はわずかに内湾し、内面に肥厚をもちごく弱い沈線を巡らせる。端部は丸くおさまる。	全体にヨコナデを施した後、底部外面は静止ヘラ削りで、口縁部付近では横方向のヘラミガキ。体部内面は放射線暗文で、見込み部分に2重の螺旋暗文を施す。暗文の幅は約1.5mmである。	橙色	精良	やや軟質		
132 47 26		土師器 高杯		浅い皿形の器形に円柱状の脚部をもつ高杯	摩耗のため、断片的にユビオサエのみが観察可能である。	黄色	やや粗、径1mm未満の砂粒少し含む。	軟質		

第19表 SM1003出土ガラス玉計測表

(単位mm)

番号	径	厚み	孔径	重さ	色 調
133	5.0	4.1	1.6	0.14	パーブリッシブルー
134	3.95	3.1	0.9	0.06	ブルシアンブルー
135	3.875	2.65	1.3	0.05	パーブリッシブルー
136	5.2	4.1	1.1	0.15	ブクウィング
137	4.325	3.5	1.7	0.08	パーブリッシブルー
138	4.275	2.65	1.6	0.06	パーブリッシブルー
139	4.1	2.9	1.4	0.07	パーブリッシブルー
140	5.325	3.8	1.7	0.16	パーブリッシブルー
141	4.65	2.9	1.1	0.12	ピーコックブルー
142	4.05	3.9	1.6	0.09	ミッドナイトブルー
143	5.875	2.8	2.1	0.14	パーブリッシブルー
144	3.625	2.2	1.0	0.01	ブクウィング

番号	径	厚み	孔径	重さ (g)	色調
145	5.2	4.5	1.0	0.2	パーブリッシブルー
146	3.8	2.1	1.1	0.01	ブックウィング
147	3.575	2.45	1.2	0.01	ブックウィング
148	5.075	3.8	1.9	0.14	ミッドナイトブルー
149	6.05	3.4	1.8	0.17	ブルシアンブルー
150	3.55	1.6	1.0	0.01	ブルシアンブルー
151	3.725	2.1	1.0	0.04	ブルシアンブルー
152	3.775	2.0	1.0	0.01	ブルシアンブルー
153	3.7	2.35	1.2	0.04	ブルシアンブルー
154	5.75	3.2	1.9	0.16	パーブリッシブルー
155	4.525	3	1.5	0.09	オックスフォードブルー
156	2.7	2	1.1	0.02	ビーコックブルー
157	2.5	1.6	1.1	0.01	ビーコックブルー
158	4.425	2.6	1.8	0.06	ブルシアンブルー
159	4.175	3.0	1.2	0.07	ブルシアンブルー
160	4.25	2.35	1.8	0.07	ブルシアンブルー
161	5.725	3.95	1.5	0.18	オックスフォードブルー
162	4.95	3.3	1.9	0.13	オックスフォードブルー
163	4.2	3.85	1.4	0.11	ダービーブルー
164	4.825	4.0	1.7	0.14	パーブリッシブルー
165	4.55	4.35	1.5	0.14	パーブリッシブルー
166	4.625	3.1	1.2	0.09	インキブルー
167	4.95	2.65	1.7	0.1	インキブルー
168	4.3	3.15	1.3	0.08	インキブルー
169	4.875	3.2	1.4	0.11	ブルシアンブルー
170	3.65	2.2	1.4	0.14	シーグリーン
171	3.925	2.9	1.9	0.06	パーブリッシブルー
172	3.6	1.35	1.2	0.03	オックスフォードブルー
173	3.425	1.85	1.1	0.03	オックスフォードブルー
174	3.25	1.7	1.2	0.03	ブルシアンブルー
175	3.55	1.65	1.1	0.03	ブルシアンブルー
176	3.6	1.8	1.2	0.03	ブルシアンブルー
177	3.45	1.7	1.1	0.03	ブルシアンブルー
178	3.5	1.7	1.1	0.03	ブルシアンブルー
179	5.0	4	1.2	0.15	ビーコックブルー
180	3.5	1.6	1.1	0.02	ブルシアンブルー
181	4.25	2.9	1.3	0.08	ブルシアンブルー

第20表 SM1003周濠内出土土器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
183 49	墳丘上	杯蓋	口径 11.35 器高 4.65	全体に丸みを帯びた器形 で、緩やかなカーブで口 縁に至る。口縁端部はわ ずかに外反している。	天井部外面は回転ヘラ切 り後、ナデによる調整。 回転ヘラ切りの周辺部に 回転ヘラケズリ、その他 の部分に回転ナデ調整。	灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒多く 含む	良好	時計回り	
184 49	周濠	杯蓋	口径 11.65 器高 3.4	天井部は緩やかなカーブ をもち、肩部にはわずかな 稜がある。口縁部はわ ずかに外反し、尖り気味 におさまる。	天井部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。天井部内面は回転ナ デ後、一定方向ナデ。	(外)暗青灰色 (内)青灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	時計回り	
185 49 27	墳丘上	杯蓋	口径 9.8 器高 4.2	全体に丸みを帯びた器 形。口径に比して器高が やや大きい。器壁が厚く、 口縁端部は丸くおさま る。	天井部外面は回転ヘラ切 り後ナデによる調整。そ の他は回転ナデ調整。	青灰色	密、1mm未満 の砂粒やや多 く含む	良好	不明	
186 49 27		杯	口径 10.8 器高 4.1	丸みを帯びた器形から緩 やかなカーブで口縁部に 至る。口縁端部はごくわ ずかに外反する。	底部外面の平坦面は回転 ヘラ切り後、ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。	暗紫灰色	密、径1mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	時計回り	
187 49 27		杯	口径 11.2 器高 3.75	平底から緩やかなカーブ で口縁に至る。口縁部は わずかな屈曲により直立 し、内面はわずかに肥厚 する。	底部外面は回転ヘラ切り 後無調整。その他は回転 ナデ調整。ナデ調整によ る器壁の凹凸著しい。	明紫灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒少し 含む	良好	反時計回 り	
188 49	周濠	高杯 脚部	脚端 9.5	端部へ向けて直線的に開 く倒杯形の高杯脚部。脚 端部は強くつまみ出さ れ、丸くおさまる。	残存部位は回転ナデ。	灰白色	密、径0.5mm未 満の砂粒少し 含む	やや軟質	不明	
189 49		弥生土 器 甕	口径 20.5	くの字状に屈曲する甕の 口縁部片。口縁部に向け て直線的に開き、ナデに よる端面をもつ。	摩耗により観察不可。	橙色	密、径1mm未 満の石英など わずかに含む	軟質		
190 49		弥生土 器 底部	脚端 6.45	底部をベタ底にし、直線 的に立ち上がる体部をも つ。	底面はユビオサエ、その 他の残存部位は摩耗によ り観察不可。	(外)にぶい黄 橙色・明黄褐 色 (内)にぶい黄 橙色	密、径2mm未 満の石英、長 石などを含む	軟質		
191 49		土器 甕	口径 23.45	頸部に明確な屈曲があ り、口縁端部に向けて大 きく開く甕の口頸部片。 器壁は全体に厚いが、端 部に向けて薄くなるつ くり。端部は丸くおさま り、端面はもたない。	残存部位はヨコナデ調 整。口縁端部内面にやや 強いナデ。	にぶい黄褐色	密、径3mm未 満の砂粒非常 に多く含む	良好		

第21表 SM1003墳丘内出土墳丘内観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
192 50	墳丘北 東	杯蓋	口径 12.4 器高 3.4	やや偏平で丸みを帯びた 器形をもつ。天井部の緩 やかなカーブから下方へ 折り曲がり、口縁部にい たる。端部は丸くおさま る。	天井部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。	灰白色	密、径1mm未 満の砂粒少し 含む	良好	時計回り	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
193 50	墳丘北 東	杯	口径 10.2 受部 12.05 立上 0.75	小形の杯口縁部片。全体に薄いつくりである。立ち上がりは上方へ直線的に伸び、端部は丸くおさまる。	残存部位は回転ナデ調整。	淡黄色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	軟質	不明	
194 50 27		高杯 脚部	脚端 9.3	端部へ向けて八の字状に開く高杯脚部片。端部は上下に拡張しており、突出度は下方が大きく端部は鋭角におさまる。	残存部位は回転ナデ調整。	明オリーブ灰色	密、径1mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	不明	
195 50 27	周濠、 墳丘	平瓶	口径 5.5 器高 9.9 最大 11.05 頸部 3.4	小形の偏球形の体部に短い口縁部をもつ。体部は最大径を上半にもち、全体に丸みがある。口縁部は外側へ緩やかに外反し、端部は丸くおさまる。	体部下半は回転ヘラ削り後、丁寧なナデ。その他は回転ナデ調整。	(外)灰色・黒色 (内)明青灰色	精良	良好	不明	
196 50 27	墳丘内	甕	口径 20.7 器高 40.6 最大 42.9 頸部 17.3	体部はやや上位に最大形をもつ球形で底部はややすぼまり気味である。口縁部は外上方へ直線的に開く。口縁端部は外側に大きく肥厚し、尖り気味におさまる。器壁は総じて薄く、底部付近の歪み著しい。	体部外面は平行タタキ後回転カキメ、内面は同心円文タタキ後部分的にナデ消し。口縁部は回転ナデ調整。	オリーブ灰色・オリーブ黒色・青灰色	密、径3mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	

第22表 SM1004石室内出土須臾器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
197 58 33		杯蓋	口径 10.5 器高 3.7	丸い天井部をもつ杯蓋。口縁内面はわずかに肥厚し、外反しており、端部はやや尖り気味におさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り後、無調整。その他は回転ナデ調整。	(外)褐灰色・暗赤褐色・にぶい赤褐色 (内)褐灰色・灰黄色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
198 58 33	閉塞石 内	無蓋高 杯	口径 13.0 器高 9.5 脚端 10.15	浅い皿形の杯部に脚部を付す。杯部は緩やかなカーブで口縁にいたり、端部は丸くおさまる。脚部は末広がりで、端部に向けて八の字状に大きく開く。端部はわずかに下方へ拡張し、丸くおさまる。	杯底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	軟質	時計回り	
199 58 33		無蓋高 杯	口径 13.7 器高 10.1 脚端 9.65	受け部をもたない皿形の杯部に脚部を付ける。杯部は緩やかなカーブで口縁に至り、わずかに外反して丸くおさまる。脚部は筒状で下半で大きく八の字状に開く。端部は下へわずかに拡張している。	杯部下半外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。杯底部内面は回転ナデ後一定方向ナデ。	灰白色・灰色	密	良好	時計回り	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
200 58 33		高杯 杯部	口径 13.1	浅い皿形の杯部をもつ高杯片。緩やかに立ち上がり、端部付近でナデによってわずかに外反する。脚部はやや短いものが付くと考えられる。	杯底部外面は回転ヘラ削り、その他の残存部位は回転ナデ調整。	灰白色	精良	良好	時計回り	
201 58 33		無蓋高 杯	口径 14.65 器高 9.7 脚端 10.8	浅い皿形の杯部に脚部を付す無蓋高杯。杯部は緩やかなカーブのまま口縁部にいたり、端部は外反気味である。脚部は下半1/3で大きく外側へ開き、端部はわずかに下へ拡張しておさまる。	杯底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒少し含む	軟質	時計回り	
202 58 33		皿	口径 10.6 最大 9.2 頸部 3.2	最大径部分が張り出している体部と大きく開いた口縁部の残存する皿片。体部の平坦部分をもち、最大径部分には弱い沈線が1条巡り円孔を穿つ。口縁部は弱い凹線を経て大きく開き、端部は丸くおさまる。	体部下半は回転ヘラ削り後静止ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。頸部内面には口頸部接合時の絞った痕跡。	灰白色	精良	やや軟質	時計回り	
203 58 33		平瓶	口径 6.5 器高 15.6 最大 15.6 頸部 3.55	偏球形の体部に細く短い口縁部が付く。口縁部は体部との接合箇所が細くくびれ屈曲し口縁に向けまっすぐ開く。	体部下半1/3は回転ヘラ削り、上半1/3は回転カキメ調整。その他は回転ナデ調整。	(外)暗灰色 (内)灰色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	

第23表 SM1004出土耳環計測表

(単位mm)

番号	縦 径	横 径	幅	厚	重さ(g)	材 質	技 法
204	30.55	29.05	8.35	9.80	5.49	銅地銀	中空

第24表 SM1004出土鉄鏃計測表

(単位mm)

番号	出土位置	型 式	全 長	鏃身部長	鏃身部幅	鏃身部厚	茎部長	茎部幅	茎部厚
205	第2次床面	平造方頭式	—	6.8	2.9	0.35	—	0.55	0.3
206	第2次床面	平造方頭式	—	6.75	2.55	0.3	—	0.55	0.3
207	第2次床面	平造方頭式	—	6.55	2.8	0.25	—	0.45	0.3
208	第2次床面	平造方頭式	—	—	2.8	0.3	—	—	—
209	第2次床面	平造方頭式	—	—	—	0.4	—	—	—
210	第2次床面	平造方頭式	—	—	2.7	0.3	—	—	—
211	第2次床面	平造方頭式	—	—	—	—	4.35	0.5	0.3

第25表 SM1004周濠内出土須恵器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
212 61 33	周濠	杯蓋	口径 9.25 器高 2.9 受部 11.05 立上 3.0	扁平な器形に欠損しているが宝珠形つまみがつくとと思われる杯蓋片。かえりは内傾し、やや尖り気味におさめる。内面の屈曲は強い。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)青灰色・灰白色 (内)暗紫灰色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
213 61 33	周濠上面	杯	口径 8.25 器高 3.65 受部 10.05 立上 0.5	口径に比して丸みを帯び、やや深めの器高をもつ。立ち上がりは内傾し、極めて短い。端部は尖り気味で、内面の屈曲は強い。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	明青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	反時計回り	
214 61 33	周濠上面	甌	最大径 9.72 頸部 3.7	偏球形の壺部をもつ甌。壺部の肩には弱い1条の沈線が巡り、最大径部分には円孔が斜め上方より穿たれる。頸部は細くしまり、上方へ大きく開くと考えられる。	壺部下半は回転ヘラ削り、底部は回転ヘラケズリ後静止ヘラ削り。その他は回転ナデ。	青灰色	密、径3mm未満の砂粒多く含む	良好	反時計回り	
215 61 33	周濠	無蓋高杯	口径 12.6 器高 9.9 脚端 9.3	やや器壁の厚い半球形の杯部に脚部を付す。杯部は緩やかなカーブで口縁にいたり、端部は内面がわずかに肥厚し丸くおさまる。脚部は末広がり、下半で大きく外側へ開く。	杯底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰色・灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	時計回り	下面の器表面に灰

第26表 石敷状遺構内出土土器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
216 64 34	石敷内	杯蓋	口径 12.2	丸みを帯びた器形をもつ杯蓋で、口縁部内面でわずかに肥厚し端部は丸くおさまる。	残存部位は回転ナデ調整。	暗青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒やや多く含む	良好	不明	
217 64 34	石敷内	杯蓋	口径 12.2 器高 3.5	天井部が平坦で、不明瞭な肩部を経て口縁部にいたる。口縁部の器壁は薄く、端部は丸くおさまる。	天井部面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒多く含む	良好	反時計回り	
218 64 34	石敷上面	杯蓋	口径 9.5	小形の杯蓋の口縁部片。緩やかなカーブで口縁にいたり、端部はやや尖り気味である。	残存部位は回転ナデ。	暗青灰色	密、径2mm未満の砂粒やや多く含む	良好	不明	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
219 64	石敷上 面	杯	口径 10.15 器高 3.5 受部 11.85 立上 0.45	偏平な器形に短い立ち上 がりをもつ。受け部はナ デにより上方へ反り、立 ち上がりは内傾する。端 部は丸くおさまり、内面 にやや強い屈曲がある。	底部外面はヘラ切り後、 ナデ調整。その他は回転 ナデ調整。	明青灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	不明	
220 64 34	石敷東 肩	杯	口径 10.4 器高 3.45 受部 12.6 立上 0.35	偏平で丸みを帯びた器形 に、短い立ち上がりがつ く。立ち上がりは内傾し、 内面に強い屈曲がある。 端部は丸くおさまる。	底部外面は回転ヘラ切り 後、ナデ調整。その他は 回転ナデ調整。	(外)紫灰色・ 暗紫灰色 (内)紫灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒やや 多く含む	良好	不明	
221 64 34	石敷上 面	杯	口径 10.2 器高 5.2 受部 12.4 立上 0.25	やや平坦な底部から緩や かに立ち上がってうけぶ に至り、短く内傾する立 ち上がりをもつ。内面は やや強い屈曲がある。	底部外面は回転ヘラ切り 後、ナデ調整。その他は 回転ナデ調整。	青灰色	密、径1mm未 満の砂粒多く 含む	良好	不明	
222 64 34	石敷内	杯蓋	口径 9.5 器高 3.4 受部 11.6 立上 0.35	器形つまみ共に偏平な杯 蓋。かえりは内傾して短 く、内面には強い屈曲が ある。つまみは宝珠形の 偏平化したものである。	天井部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。	明紫灰色	密、径4～5 mmの砂粒含 み、径1mm未 満の砂粒少し 含む	良好	時計回り	
223 64	石敷内	杯蓋	口径 12.2	偏平な器形の杯蓋の口縁 部片。かえりは短く、断 面三角形の突帯となっ ている。口縁部は内面がわ ずかに肥厚し、丸くおさ まる。	残存部位は回転ナデ。	オリーブ灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒少し 含む	良好	不明	
224 64 34	石敷内	杯	口径 9.2 器高 3.95	平底に直線的に開く口縁 をもつ。口縁端部は丸く おさまる。	底部外面は回転ヘラ切り 後無調整。その他は回転 ナデ調整。	灰色	密、径3mmの 砂粒をわずか に含み、0.5mm 未満の砂粒少 し含む	良好	時計回り	
225 64 34	石敷内	杯	口径 10.25 器高 3.8	平底で外上方へまっすぐ 開く口縁部をもつ。口縁 端部は丸くおさまる。全 体に器壁が厚い。	底部外面は回転ヘラ切り 後無調整。その他は回転 ナデ調整。	青灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	時計回り	
226 64 34	石敷内	杯	口径 16.4 器高 4.4 脚端 9.2	平底に断面隅丸方形の高 台を付し、緩やかなカー ブで口縁にいたる。端部 は外反し、丸くおさまる。	底部外面は回転ヘラ切り 後、カキメ原体とナデに よる調整。その他は回転 ナデ調整。	青灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒やや 多く含む	良好	反時計回 り	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
227 64 34		杯	口径 14.9 器高 4.35 脚端 9.2	平底に断面台形の高台をつける杯身。口縁は緩やかに立ち上がり、わずかに外反する。端部は丸くおさまる。	底部外面は回転ヘラ切り、その他は回転ナデ調整。	灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	不明	
228 64	石敷上 層	土師器 杯	口径 12.3 器高 3.4	体部から緩やかなカーブで口縁部にいたり、端部付近でナデによってくの字状に外反し、端部は尖り気味におさまる。	観察が困難であるが、体部内面に放射状暗文か。口縁端部内外面はヨコナデ。	(外) 橙色 (内) 浅黄橙色・ 橙色	密、径0.5mm未満の砂粒やや多く含む	やや軟質		
229 64 34	石敷上 層	平瓶	最大 16.15 頸部 4.9	偏球形の体部にやや強く傾く口縁部をもつ。体部は最大径を中半にもち、肩の張りが無い。底部はやや平坦である。	体部外面下半は回転ヘラ削り、体部上面は回転カキメ調整。その他の部位は回転ナデ調整。底部外面に強いユビオサエ。	(外) 灰色・灰 白色 (内) 灰黄色・ にぶい黄褐色	密、径2mm未満の砂粒少し含む	やや軟質	時計回り	

第27表 SM1005出土耳環計測表

(単位mm)

番号	縦 径	横 径	幅	厚	重さ(g)	材 質	技 法
230	23.90	25.65	5.60	7.60	13.56	銅地銀	中実
231	22.85	25.90	5.90	6.70	12.31	銅地銀	中実

第28表 SK1001出土須恵器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
232 71 41		平瓶	最大 21.15 頸部 4.9	偏球形で肩の張りが強い平瓶の体部。口縁部は欠損しているが、直線的に開くものと考えられる。体部の上面は緩やかなドーム状を呈している。	体部下半1/3以下は回転ヘラ削り、ただし底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。その他は回転ナデ調整。体部上面内部に粘土の円盤充填の痕跡。	(外) 明青灰色・ 青灰色 (内) 紫灰色	密、径3mm未満の砂粒多く含む	良好	時計回り	

第29表 SK1002出土須恵器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
233 73 41		杯蓋	口径 12.7 器高 4.15	やや平坦な天井部をもつ杯蓋片。緩やかなカーブのまま口縁にいたり、端部は丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	青灰色	密、径1mm未満の砂粒やや多く含む	やや軟質	反時計回り	
234 73 41		甕	最大 51.6 頸部 24.2	体部の最大径をやや上位寄りにもつ甕の体部で、口頸部を欠損するが外上方向へ立ち上がるらしい。底部は丸い。肩部には吊手が4箇所につく。	体部内面は縦方向の擬格子タダキ後、回転カキメ調整。内面は中心部に刻みをもち車輪文となる、同心円当てによる調整。	緑灰色	密、径3mm未満の砂粒やや多く含む	良好	不明	体部上半に自然釉

第30表 SK1002出土耳環計測表

(単位mm)

番号	縦 径	横 径	幅	厚	重さ(g)	材 質	技 法
235	24.00	22.00	5.65	6.85	1.87	銅地銀	中実

第31表 第10・第11調査区出土土器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
236 75 41	10区下	杯蓋	口径 14.2	丸みを帯びた器形をもつ杯蓋片。口縁端部は丸くおさまる。ナデによる凹凸著しい。	残存部位は回転ナデ調整。	青灰色	密、径1mm未満の砂粒やや多く含む	良好	不明	
237 75	10-11 区アゼ	杯蓋	口径 12	緩やかなカーブをもつ杯蓋の口縁部片。端部は丸くおさまる。	残存部位は回転ナデ。	灰色	密、径0.5mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	不明	
238 75	11区包 含層	杯蓋	口径 10.9 器高 3.65	丸みを帯びた半球形の器形をもつ。器壁が全体に薄い。緩やかなカーブで口縁部にいたり、やや尖り気味におさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。天井部内面は回転ナデ後、一定方向ナデ。	(外)灰白色・ 灰色 (内)明青灰色	密、径2mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	時計回り	
239 75 42	上面	杯	口径 10.3 器高 4.05	丸みを帯びた底部から緩やかなカーブのまま口縁にいたる。肩部には不明瞭な沈線が1条巡り、端部は丸くおさまる。	底部外面は回転ヘラ切り後無調整、その他は回転ナデ調整。	明青灰色	密、径1mm未満の少し含む	良好	不明	
240 75	石敷東 肩	杯	口径 12.9 受部 15.2 立上 0.9	浅い皿形の器形に短い立ち上がり有する。立ち上がりは内傾し、端部はやや尖り気味である。内面の屈曲は弱い。	残存部位は回転ナデ調整。	灰色	精良	良好	不明	
241 75 42	10区上 南	杯	口径 9.1 器高 3.35 受部 10.6 立上 0.3	口径・器高とも小形の杯身片。立ち上がりは短く、基部が太いつくり。内面に強い屈曲がある。	回転ナデ調整。底部外面にヘラおこしの痕跡が明瞭に残る。	明青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒少し含む	やや軟質	不明	
242 75 42	10区上	杯	口径 8.8 受部 10.55 立上 0.35	小形の杯身で、全体に器壁が薄い。内傾した立ち上がりは上方へ反り、内面にナデによる弱い凹線が巡る。内面の屈曲は強い。	残存部位は回転ナデ。	灰白色	密、径1mm未満の砂粒少し含む	良好	不明	
243 75 42	11区耕 作土	杯蓋	口径 8.7 器高 3.2 受部 10.8	器形・宝珠形のつまみが共に偏平な杯蓋。かえりは基部が太く内傾しており、端部は尖り気味である。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	暗青灰色	精良	良好	時計回り	
244 75	10区上 包含層	杯蓋	口径 15.5	非常に偏平な器形の杯蓋で、天井部にはやはり偏平なつまみがつくものである。かえりは短く内傾し、断面三角形を呈している。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	青灰色	密、径1mm未満の砂粒多く含む	良好	反時計回り	
245 75	10区上 アゼ	杯蓋	口径 14.5 受部 12.3	非常に偏平な器形をもつ杯蓋口縁部片。かえりは角の丸い断面三角形で内面の屈曲はやや強い。口縁端部は丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色	密、径1mm未満の砂粒やや多く含む	良好	反時計回り	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
246 75	11区包 含層	杯蓋	口径 7.5	偏平な器形の杯蓋口縁部片。内面のかえりは断面三角形を呈している。	残存部位は回転ナデ調整。	灰白色	精良	良好	不明	
247 75 42	10-11 区アゼ	杯蓋	口径 15.15	偏平な器形の杯蓋で、欠損している蓋も偏平であったと考えられる。かえりは短く断面三角形で内面にやや強い屈曲がある。口縁端部は丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ。	青灰色	密、径2mm未満の砂粒多く含む	良好	反時計回り	
248 75 42	上面	杯	口径 13.35 器高 4.95 脚端 7.75	平底に断面形が菱形に近い高台を有する杯部破片。口縁部は緩やかに上方へ立ち上がり、端部は丸くおさまる。	残存部位は回転ナデ調整。	明青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	不明	
249 75 42	10区上 アゼ	杯	口径 16.0 器高 4.6 脚端 9.1	平底に断面方形の高台をつける杯身。緩やかなカーブで口縁にいたり、わずかに外反する。端部は丸くおさまる。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	緑灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	
250 75 42	10-11 区アゼ	台付壺 ?	脚端 8.15	台付壺の壺部と脚部との接合部位下。脚部は倒杯形の器形で、中半に1条のやや弱い沈線が巡る。端部は内面側へ斜めに拡張し、丸くおさまる。	壺底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。壺底部内面に脚部への接合時のユビオサエ。	灰色	密、径1mm未満の砂粒やや多く含む	良好	時計回り	
251 75 42	10-11 区アゼ	台付長 頸壺 (?)	脚端 8.4	短く、外側へ開く脚部。端部は水平方向と下方へ大きく拡張し、下方の端部はやや尖り気味である。	残存部位は回転ナデ。	赤灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	
253 75	11区包 含層	甌	口径 9.8	口縁部でくの字状に屈曲し、大きく開くはそう。端部は丸くおさまる。	残存部位は回転ナデ調整。	(外)暗青灰色 (内)青灰色	精良	良好	不明	
254 75 42	10区下 包含層	提瓶	最大 15.55	偏球形の体部をもつ提瓶片。側縁の口縁を欠損しており、退化し浮文状となった吊手をもつ。	製作時下面であった側を回転ヘラ削り、上面であった面を回転カキメ調整。	(外)オリーブ 灰色・灰色 (内)灰白色・ 灰色	密・径2mm未満の砂粒SU 越す含む	良好	時計回り	
255 75 42	11区ア ゼ	甌	最大 9.55 頸部 3.55	偏球形の壺部に大きく開く口頸部を付す。壺部は最大径をやや上位にもち、底部は丸い。肩部に2条の沈線が巡る。中位に円孔が穿たれていた部分は、遺存していない。頸部は内法で1.8cmと細くしまり、外側へ大きく開く。	壺部下半外面1/3は回転ヘラ削り、同内面底部は円形当て具による押圧。その他は回転ナデ調整。	(外)暗紫灰色・ 暗緑灰色 (内)暗紫灰色	やや粗、径2mm未満の砂粒多く含む	良好	反時計回り	
256 75 42	10区上 包含層	弥生土 器 底部	底径 11.3	ベタ底のやや大きめの底部から上方へと立ち上がる体部をもつ。立ち上がり部分の器壁は1.4cmである。	体部外面にハケメらしい痕跡、体部内面は左上方へのヘラ削り。底面の周縁にはナデが回る	橙色	密、径4mm未満の砂粒やや多く含む、結晶片岩を含む	やや軟質		

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
257 75 42	10区下 包含層	弥生土 器 底部	底径 7.3	底面をベタ底としており、ナデによって端部が外へ張り出す。体部は外上方へ大きく開く。	体部外面は上方へのタテハケ、内面は左上方へのヘラ削り。底面はナデ及びユビオサエ。	(外)にぶい橙色 (内)灰白色	密、径4mm未満の砂粒及び結晶片岩含む	やや軟質		
258 75 42	10-11 区アゼ	土師器 甕	口径 26.5	くの字状に外側へ屈曲する甕の口縁部。屈曲は内面において特に明瞭で、端部に向けて外反しながら短面をつくり四角くおさめる。	全面的に横ナデによって調整し、屈曲部にはユビオサエが施される。	にぶい黄橙色	やや粗、径3mm未満の砂粒非常に多く含む	良好		

第32表 第10・第11調査区出土石鏃計測表

(単位mm)

番号 挿図 図版	挿図	図版	形 式	石 材	全 長	幅	厚 み	重 量 (g)
259	76	42	凹基無茎	サヌカイト	19.00	18.00	3.50	1.31
260	76	42	凹基無茎	サヌカイト	23.00	21.50	4.20	2.11
261	76	42	凹基無茎	サヌカイト	25.00	19.50	3.80	1.20
262	76	42	凸基有茎	サヌカイト	34.90	20.40	4.30	3.48
263	76	42	凹基無茎	サヌカイト	28.90	21.00	6.00	2.96
264	76	42	凸基有茎	サヌカイト	28.90	22.00	4.70	2.87
265	76	42	凹基無茎	サヌカイト	29.70	22.30	3.80	2.98
266	76	42	平基無茎	サヌカイト	26.60	22.00	4.60	2.62

第33表 SM1007出土須恵器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
268 84 46		蓋	口径 8.1 器高 3.35 受部 10.9 立上 0.04	器形・つまみ共に偏平な蓋。かえりは下方へ伸び、端部はやや尖り気味におさまる。かえり内面には強い屈曲がある。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。天井部内面は回転ナデ後不整方向ナデ。	黄灰色	密、径0.5mm未満の砂粒や多く含む	良好	時計回り	
269 84		高杯蓋	口径 14.0 器高 5.85	偏平なつまみを付し、丸みをもっており器高が高い。肩部には弱い稜と沈線が巡る。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	紫灰色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	反時計回り	
270 84 46		高杯蓋	口径 15.9 器高 4.8	器形は全体に丸みを帯び、内面の器壁の凹凸が著しい。口縁端部は丸くおさめる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ。天井部内面は回転ナデ後不整方向ナデ。	(外)明青灰色・ 青灰色 (内)明青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
271 84	周濠、 羨道	高杯蓋	口径 14.6 器高 4.1	肩部に明瞭な沈線が1条巡り、天井部と口縁部とが明瞭に分かたれる。器壁は全体に厚く、端部は丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	青灰色	密、径3～5mmの砂粒ごくわずかに含む、径0.5mm未満のやや多く含む	良好	反時計回り	

番号 挿図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
272 84		高杯蓋	口径 13.6	天井が丸みを帯びると考えられる蓋の口縁部片。退化して弱い稜と凹線が巡り、口縁にいたる。口縁端部は丸くおさまる。	残存部位は回転ナデ。	灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒少し含む	良好	不明	
273 84	1次床 面	高杯蓋	口径 15.5 器高 4.8	平坦な天井部をもち、わずかに内湾する口縁をもつ。口縁端部は内面がわずかに肥厚し、丸くおさめる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)灰白色・ 灰色 (内)灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	やや軟質	時計回り	
274 84	2次床 面間	高杯蓋	口径 13.5	やや直立気味の蓋の口縁部片。肩の部分に弱い稜をもち、端部は丸くおさまる。	残存部位は回転ナデ調整。	灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	不明	
275 84 46		高杯蓋	口径 13.8 器高 4.25	やや平坦な天井部をもつ蓋。口縁は緩やかにカーブし、端部でごくわずかに外反する。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	青灰色	密、径1mm未満の砂粒少し含む	良好	反時計回り	
276 84		杯蓋	口径 13 器高 4.3	丸みを帯びた器形の杯蓋片。肩にはわずかな稜の名残があり、口縁部に至る。端部はやや尖り気味におさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。天井部外面中央部にヘラおこし?の痕跡	(外)黒褐色 (内)灰赤色	密、径1mm未満の砂粒少し含む	良好	反時計回り	
277 84 46		高杯蓋	口径 12.8 器高 3.75	平坦な天井をもつ蓋。口縁部はわずかに内湾し、端部はやや尖り気味に薄く仕上げる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。天井部外面には回転ヘラ切りの痕跡を明瞭に残す。	(外)灰白色 (内)灰色	密、径5mmの砂粒を含み、径1mm未満の砂粒少し含む	良好	時計回り	
278 84 46	2次床 面・床 間	高杯蓋	口径 11.9 器高 3.85	天井部がやや平坦な有蓋高杯蓋。緩やかなカーブで口縁にいたり、端部はやや尖り気味におさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、ヘラ削り前の回転ヘラ切りの痕跡明瞭。その他は回転ナデ調整で、天井部内面は回転ナデ後、一定方向ナデ。	青灰色	密、径2mm未満の砂粒やや多く含む	良好	時計回り	
279 84 46		高杯杯 部	口径 11.85 受部 14.8 立上 0.5	浅い皿形の器形に短い立ち上がり有する。立ち上がりは直線的に内傾し、端部はやや尖り気味である。内面の屈曲はない。器壁にナデによる凹凸著しい。	残存部位は回転ナデ調整。	灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
280 84 46		有蓋高 杯	口径 13.7 器高 15.0 脚端 12.0 受部 15.85 立上 0.25	長脚2段透しをもつ有蓋高杯。杯部は丸みを帯びた浅い皿形で、立ち上がりをもつ。受け部の端部は丸く、口縁端部は尖り気味におさまる。内面は屈曲しない。脚部はハの字状の末広がり端部斜め下方には平坦面を作り出す。脚部中半には2条の弱い沈線を区画として、スリット状の細い透し穴を上下並列に穿つ。	杯底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。杯底部内面は回転ナデ後、一定方向ナデ。	(外)灰色・暗 赤色 (内)灰白色	密、径1mm未満の砂粒や八尾多く含む	やや軟質	時計回り	

番号 挿図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
281 84 46		有蓋高 杯	口径 12.7 器高 14.85 受部 15.25 立上 0.55	長脚2段透しをもつ有蓋高杯。杯部はやや扁平で、やや深めである。口縁部は内傾し、端部は尖り気味である。内面の屈曲は弱い。脚部は円柱状で下半で外側へ大きく開く。端部は上下にわずかに拡張する。弱い沈線2条によって上下に区画し、それぞれに長方形透しを上下並列2方向に穿つ。	杯底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整	(外)青灰色 (内)紫灰色	密、径2mm未満の砂粒や多く含む	良好	時計回り	
282 84 46		有蓋高 杯	口径 12.35 器高 14.25 脚端 16.6 受部 14.9 立上 0.6	長脚2段透しをもつ有蓋高杯。杯部はやや角張った浅い皿形で、上方へ反る短い立ち上がりをもつ。受け部の端部・口縁端部はいずれも丸くおさまる。内面の屈曲はやや強い。脚部は八の字状の未広がり端部斜め下方には平坦面を作り出す。脚部中半には2条の弱い沈線を区画として、スリット状の細い透し穴を上下並列に穿つ。	杯底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)紫灰色・ 暗青灰色 (内)紫灰色	密、径2mm未満の砂粒少し含む	良好	時計回り	
283 84		有蓋高 杯	口径 13.8 受部 15.9 立上 0.55	長脚2段透しをもつ有蓋高杯片。杯部は扁平で、立ち上がりは短く直立する。端部はやや尖り気味で、内面にはやや強い屈曲がある。脚部は円柱状で下半で徐々に外側へ開く。2状の弱い沈線で2段に区画され、上下並列でスリット状の透しを2方向に穿つ。	杯底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)灰白色 (内)灰色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	反時計回 り	
284 84 46		有蓋高 杯	口径 12.4 器高 15.35 脚部 12.55 受部 15.35 立上 0.6	扁平な杯部に脚部を付す。杯部の立ち上がりは内傾し上方へ反る。口縁内部の屈曲は強く、端部は丸くおさまる。脚部は長脚2段透しで、スリット状の透しを2箇所上下並列で穿つ。中半に弱い沈線を2条巡らせる。端部は上下に拡張する。	杯底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
285 84	P-7/P -8	高杯	脚端 12.25	下半で八の字状に大きく開く高杯の長脚脚部。長方形の透しを上下並列2方向に穿ち、弱い2条の沈線が巡る。脚端部は下方へ大きく拡張し、やや尖り気味におさめる。	杯底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。杯底部内面は回転ナデ調整後、一定方向ナデ。	(外)灰白色・ 暗灰色 (内)灰白色	密、径1mm未満の砂粒少し含む	良好	時計回り	
286 84		有蓋高 杯	口径 13.35 受部 15.6 立上 0.35	長脚2段透しをもつ有蓋高杯片。杯部は扁平な器形で、立ち上がりは短く、内傾した後上方へ立ち上がる。脚部は円柱状で、弱い2状の沈線で区画され上下に並列のスリット状透しを2方向に穿つ。	杯底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)明青灰色・ 暗青灰色 (内)明青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒や多く含む	良好	時計回り	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
287 84 46		提瓶	口径 5.75 器高 17.2 最大 13.95	偏球形の体部の側縁に口縁を付す。体部は厚みが9.2cmと特に扁平で、内面には整形時の凹凸を良く残す。口縁部は直線的に開き、端部は丸くおさまる。体部肩に吊手はもたない。	体部のうち、製作時下面側の外面は回転ヘラ削り、上面側は回転ナデ調整で、上面側内面には粘土板の充填の痕跡。その他の部位は回転ナデ。	明赤褐色	密、径10mmの砂粒を含むほか、径3mm未満の砂粒や多く含む	良好	時計回り	

第34表 SM1007出土子持器台観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
288 85 46		子持器 台	口径 23.7 器高 21.7 脚端 16.75	浅い皿形の鉢部と柱状の脚部とから成る。鉢部は底が平坦で口縁に向かって緩やかなカーブで立ち上がる。口縁は緩やかに外反し、端部は丸みを帯びた端面をもち、沈線が1条巡る。口縁部には杯を4点子器として配する。脚部は鉢部との接合部分では鉢部の形状に合わせ外側へ開く。中半では円柱状に伸び下半1/3でハの字状に直線的に開く。中半に弱い2条の沈線を2単位巡らせ、長方形透しを上下並列に3方に穿つ。脚端部はナデによって外反し、外側へ大きく拡張する。	鉢底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。子器と鉢部との接合部、鉢部と脚部との接合部には丁寧なナデが施される。	暗紫灰色	密、径2mm未満の砂粒や多く含む	良好	時計回り	
288 85		子持器 台 蓋	口径 8.8 器高 3.85	肩部分の張りのない丸みを帯びた器形に扁平なつまみを付す。口縁端部は丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰色	密、径2mm未満の砂粒や多く含む	良好	時計回り	
288 85		子持器 台 蓋	口径 10.5 器高 4.15	丸みを帯びた器形に扁平なつまみを付す。緩やかなカーブで口縁にいたり、端部はやや尖り気味におさまる。つまみは斜め上方へ張り出し、中央部がくぼむ。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	青灰色	密、径1mm未満の砂粒や多く含む	良好	時計回り	
288 85		子持器 台 杯蓋	口径 10.3 器高 4.2	肩部分の張りのない丸みを帯びた器形に扁平なつまみを付す。口縁端部は丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。口縁端部は回転ナデ後、横ナデ。	暗紫灰色	密、径2mm未満の砂粒少し含む	良好	時計回り	
288 85		子持器 台 杯蓋	口径 9.4 器高 2.2	口縁端部のみ破片。丸みを帯びた器形で端部はやや尖り気味におさまる。	回転ナデ調整。端部内外面は連続したユビオサエ。	暗紫灰色	密、径1mm未満の砂粒少し含む	良好	不明	
288 85		子持器 台 杯	口径 8.8 受部 10.7 立上 0.75	扁平な器形に短い立ち上がりをもつ子持器台子器杯身。立ち上がりは内傾し、薄く仕上げられている。内面には強い屈曲がある。	底部外面には回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	暗紫灰色	密、径2mm未満の砂粒少し含む	良好	時計回り	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
288 85		子持器 台 杯	立上 0.5	偏平な器形の子持器台子 器杯身の口縁部片。立ち 上がりは内傾し、短い。	残存部位は回転ナデ調 整。底部内面には親器へ の接合時の強いユビオサ エ。	暗紫灰色	密、径1mm未 満の砂粒少し 含む	良好	不明	
288 85		子持器 台 杯	口径 8.4 受部 10.35 立上 0.65	偏平な器形に短い立ち上 がりもつ子持器台子器の 杯身。立ち上がりは上方 へ反る。	底部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。	暗紫灰色	密、径2mm未 満の砂粒少し 含む	良好	時計回り	
288 85		子持器 台 杯	口径 8.4 受部 10.1 立上 0.55	偏平な器形に口径に比し てやや長い立ち上がりをも つ子持器台子器の杯 身。口縁部はやや外反し、 丸くおさまり、内面にや や強い屈曲がある。	底部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。	暗紫灰色	密、径1mm未 満の砂粒少し 含む	良好	時計回り	

第35表 SM1008出土須恵器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
291 92	石室埋 土	杯蓋	口径 9.0	口径・器高とも小形の杯 蓋口縁部片。緩やかなカ ープで口縁部にいたり、 端部は丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。	灰白色	精良	良好	時計回り	
292 92	石室前	杯	口径 12.85 受部 15.15 立上 0.25	短い立ち上がりを有する 杯の口縁部片。立ち上が り内面の屈曲は強く、口 縁端部は丸くおさまる。	残存部位は回転ナデ調 整。	(外)暗灰色・ 灰白色 (内)暗灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒ごく わずかに含む	良好	不明	
293 92	石室前	高杯 脚部	脚部 9.45	端部へ向けて八の字状に 開く高杯脚部片。全体に 薄いつくりで、長脚のもの としては短めのものに なると考えられる。端部 は下方へ拡張し、丸くお さまる。	残存部位は回転ナデ調 整。	灰白色	密、径1mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	不明	
294 92 48	石室前	無蓋高 杯	脚端 11.1	末広がりの高杯脚部で端 部付近で外側へ大きく開 く。端部は下方への拡張 が著しく、尖り気味にお さまる。	杯底部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。	(外)灰色・暗 灰色 (内)灰色	径1mm未満の 砂粒わずかに 含む	良好	時計回り	
295 92 48	石室前	平瓶	口径 5.65 器高 15.55 最大 17.35 頸部 3.95	偏球形の体部に短い口縁 部がつく。口縁部は単純 なつくりで、端部を丸く おさめる。中央に弱い沈 線が1条巡る。	体部は下半は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。ヘラ削りは複数回に わたって行われている。	(外)青灰色・ オリーブ黒色 (内)青灰色	密、径2mm未 満の砂粒少し 含む	良好		
296 92 48	石室前	無蓋高 杯	脚端 10.7	皿形の杯部に脚部を付 す。杯部は同様の他の器 形に比べ、やや深めとな ると考えられる。脚部は 八の字状の末広がり、 端部付近で大きく外側へ 開く。端部は下方へ拡張 し、丸くおさまる。	杯底部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。	(外)暗青灰色 (内)暗青灰色・ 青灰色	密、径1mm未 満の砂粒少し 含む	良好	反時計回 り	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
297 92 48	石室前	無蓋高 杯	脚端 10.4	浅い皿形になると考えられる杯部に末広りの脚部を付す。杯部は緩やかなカーブで立ち上がり、口縁はナデによって外側にわずかに屈曲する。脚部は端部付近で八の字状に大きく開き、端部は下方へ拡張し尖り気味におさめる。	杯底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)明オリーブ灰色・灰色 (内)灰色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	反時計回り	
298 92 48	石室前	甕	口径 18.25 器高 42.65 最大 38.0 頸部 15.8	体部最大径を中半よりやや上位にもつ球形の体部に短く外反する口縁部をもつ。口縁部は頸部の屈曲より緩やかに外反する。端部には平坦面を作り出し、上方へ拡張し丸くおさめる。底部は緩やかな丸みをもつ。	体部外面は擬格子タタキの後、回転カキメ調整。内面は同心円当て具による押圧。口縁部内外面は回転ナデ調整。	暗青灰色	密、径3mm未満・径0.5mm未満の砂粒の砂粒ごくわずかに含む	良好	不明	

第36表 ST1006出土須恵器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
299 96 58	抜取り	杯	口径 10.4 器高 4.4 受部 13.0 立上 0.3	浅い皿形の器形に短い立ち上りを付す。受け部の端部は平坦面を作り出す。立ち上がりは上方へ反り、端部は尖る。内面の屈曲は強い。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)明青灰色・青灰色 (内)明青灰色 (外)明青灰色・青灰色 (内)明青灰色	密、径1mm未満の砂粒少し含む	良好	時計回り	

第37表 ST1007出土須恵器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
300 98 58		杯蓋	口径 11.3 器高 3.7	平坦な天井部から明確な肩部をもたず、下方へ折り曲がり口縁に至る。端部は丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り後、無調整。その他は回転ナデ調整。	(外)明青灰色 (内)明青灰色・暗緑灰色	密、径2mm未満の砂粒やや多く含む	良好	反時計回り	
301 98 58		杯	口径 10.15 器高 4.1 受部 12.5 立上 0.35	やや深い杯部に短い立ち上がりをもつ。立ち上がりは内傾し、端部は尖り気味である。内面に強い屈曲がある。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。底部外面中央部は回転ヘラ削り後、ナデ・オサエによる調整。	灰色	径、0.5mm未満の砂粒少し含む	やや軟質	反時計回り	

第38表 ST1009出土須恵器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
302 102 58		杯蓋	口径 12.5 器高 3.9	丸みを帯びた器形から緩やかなカーブで口縁部に至る。口縁部はわずかに肥厚し沈線の名残をとどめ、端部は丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色	密、径1～3mmの砂粒ご桑図化に含み、径0.5mm未満の砂粒少し含む	良好	時計回り	
303 102 58		杯	口径 11.35 器高 4.05 受部 13.5 立上 0.4	丸みを帯びた器形に短い立ち上がりをもつ。立ち上がりは上方へ反り、口縁端部はやや尖り気味である。内面にはやや強い屈曲がある。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	青灰色	密、径1～3mmの砂粒をごくわずかに含み、0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	

第39表 石室状遺構出土須恵器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
304 105 62		台付碗	口径 10.0 器高 11.2 最大 11.4 脚端 10.1	球形の体部に直立する口縁をもつ碗部と倒杯形の短い脚部をから成る。碗部はなめらかな形態で、上半には非常に弱い退化した沈線が2条巡る。口縁部内面は肥厚し、端部は丸くおさまる。脚部は上湾し、斜め下方に端面を作り出し、さらに下方に拡張している。	碗底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色	密、径1mm未満の砂粒少し含む	良好	反時計回り	
305 105 62		台付碗 ?	脚端 6.4	体部は口縁が上方へ伸び、碗形形となると考えられる。脚部は短く、端部に向けて大きく開く。中半に3方向に径約3mmの円孔を穿つ。	体部下外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	暗青灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	反時計回り	

第40表 石室状遺構出土匂玉計測表

(単位mm)

番号	材 質	A	B	C	D	E	F	重量(g)
306	ヒスイ	20.95	13.50	8.55	9.00	2.70	1.35	4.25

第41表 第12～第14調査区出土須恵器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
307 107	12区 包含層	杯蓋	口径 13.8	緩やかなカーブをもつ杯蓋口縁部片。端部に向けやや器壁が薄くなり、丸くおさまる。	残存部位は回転ナデ調整。	青灰色	密、径1mm未満の砂粒少し含む	良好	不明	
308 107	13区 包含層	杯蓋	口径 13.4	緩やかなカーブの器形をもつ杯蓋口縁部片。口縁端部はやや尖り気味におさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
309 107	12区 包含層	杯蓋	口径 11.3	丸みを帯びた器形をもつ 杯蓋口縁部片。器壁にナ デによる凹凸が著しい。 口縁端部はやや尖り気味 におさまる。	天井部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。	(外)明紫灰色 (内)明青灰色	精良	良好	反時計回 り	
310 107	13区 包含層	杯蓋	口径 11.85 器高 2.7	口径に比して器高の低い 偏平な杯蓋。肩部で下方 へ折れ曲がり口縁部にい たり、外反し丸くおさま る。口縁端部外面には沈 線が1条巡る。	天井部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。	青灰色	密、径1mm未 満の砂粒やや 多く含む	良好	不明	
311 107	13区 包含層	杯蓋	口径 12.6	歪みのためか、器高がか なり大きくなる杯蓋片。 丸みを帯びた器形で、端 部は丸くおさまる。	残存部位は回転ナデ調 整。	青灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	不明	
312 107	12区 包含層	杯	口径 12.75 受部 15.0 立上 0.3	偏平な器形をもつ杯身。 立ち上がりは短く内傾 し、端部はやや尖り気味 におさまる。	残存部位は回転ナデ調 整。	暗青灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	不明	
313 107	12区 包含層	杯	口径 10.45 受部 12.7 立上 0.25	浅い皿形の器形に短い立 ち上がりを有する。器壁 が3～4mmと薄い。立ち 上がりは内傾し、端部は 尖り気味である。内面の 屈曲はやや強い。	残存部位は回転ナデ調 整。	明青灰色	密、径0.5mm未 満の砂粒少し 含む	良好	不明	

第42表 第12～第14調査区出土石鏃計測表

(単位mm)

番号	挿図	図版	形 式	石 材	全 長	幅	厚 み	重 量 (g)
316	109	62	凹基無茎	サヌカイト	15.60	14.50	3.75	0.91
317	109	62	凸基無茎	サヌカイト	32.50	24.10	6.70	5.99
318	109	62	凹基無茎	サヌカイト	24.30	19.60	4.60	2.06
319	109	62	平基無茎	サヌカイト	31.00	20.00	5.50	2.50
320	109	62	凹基無茎	サヌカイト	31.30	22.50	4.00	1.70

写 真 图 版

図版 1



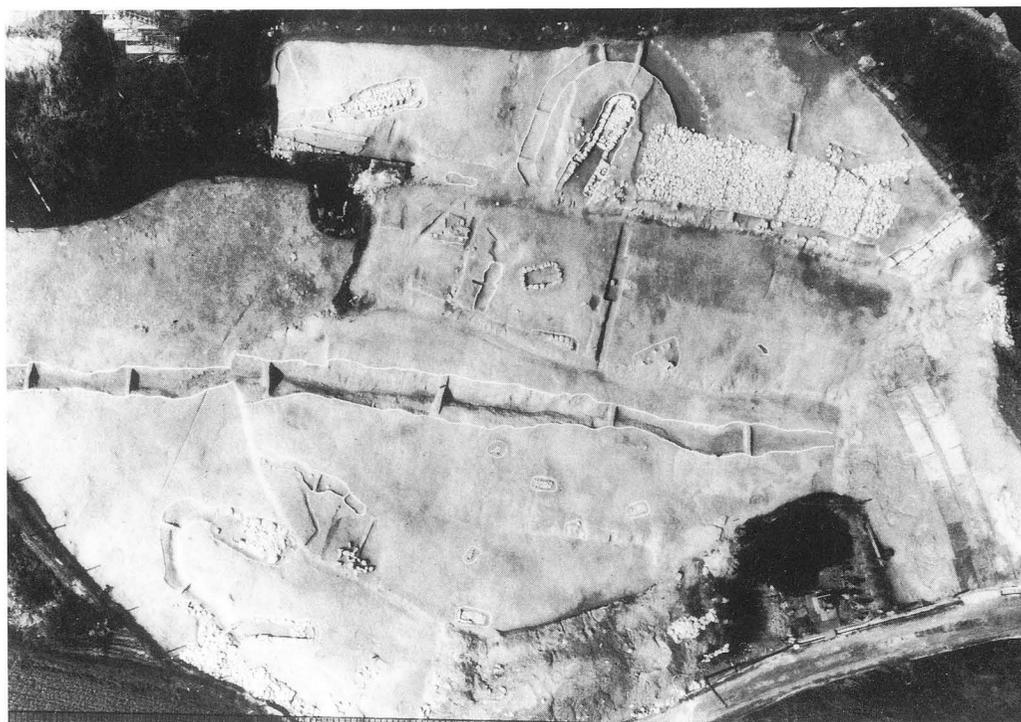
調査前全景（東より）



調査前風景（第1～第3調査区）



調査区遠景 (第4～第14調査区)



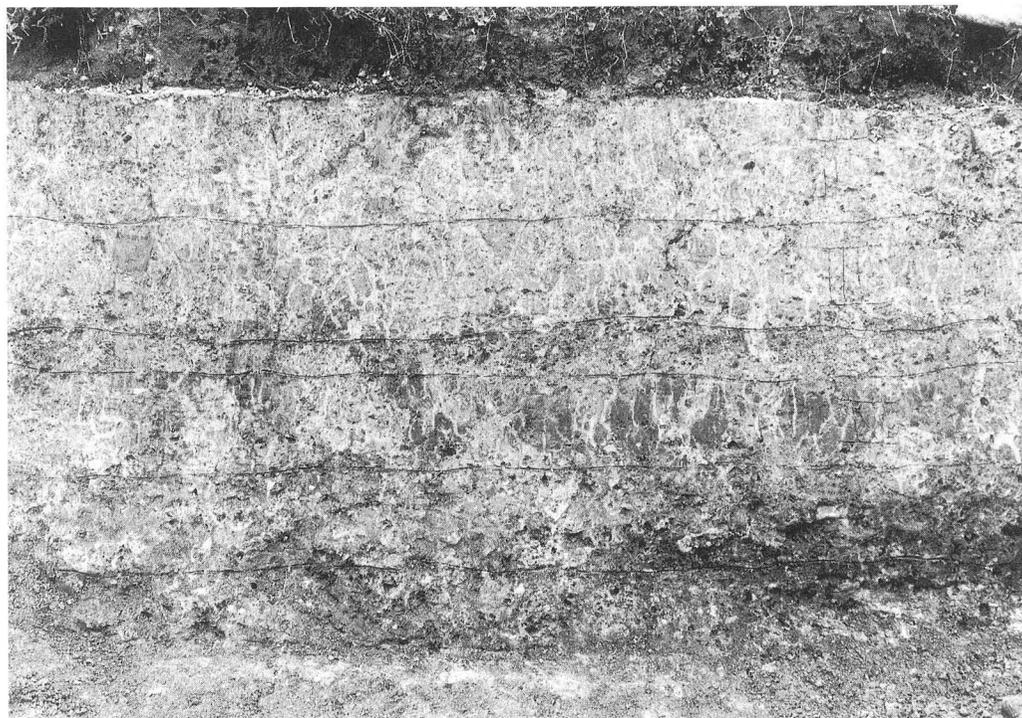
遺構検出状況 (第10～第13調査区)



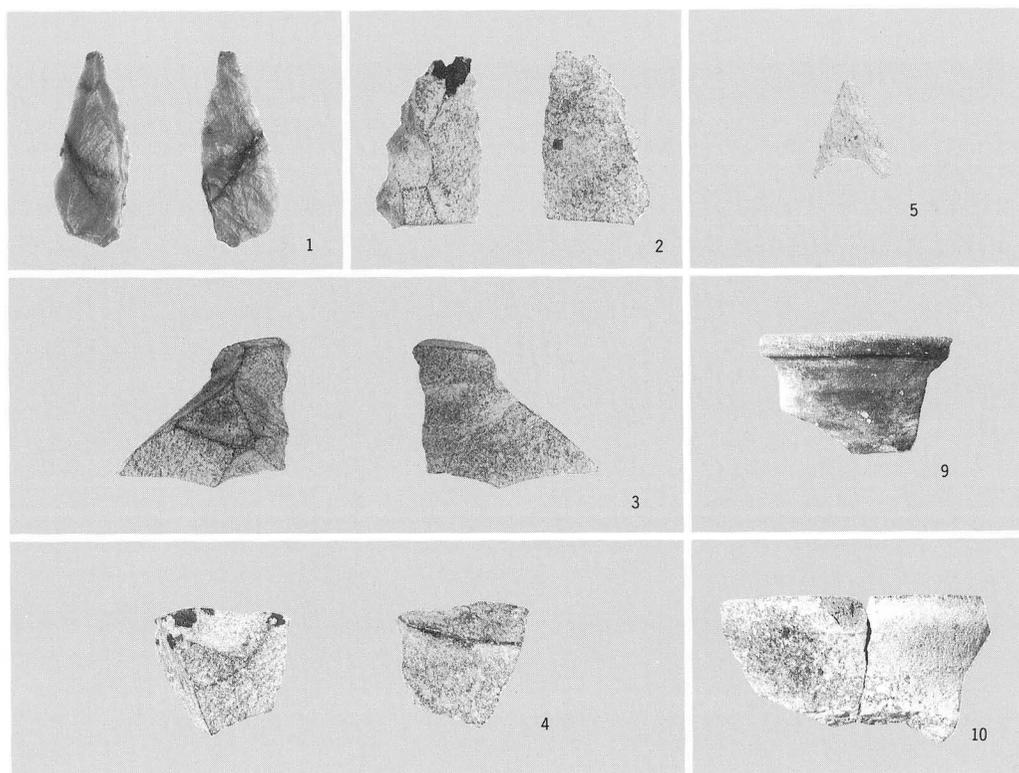
第 1 調査区完掘状況



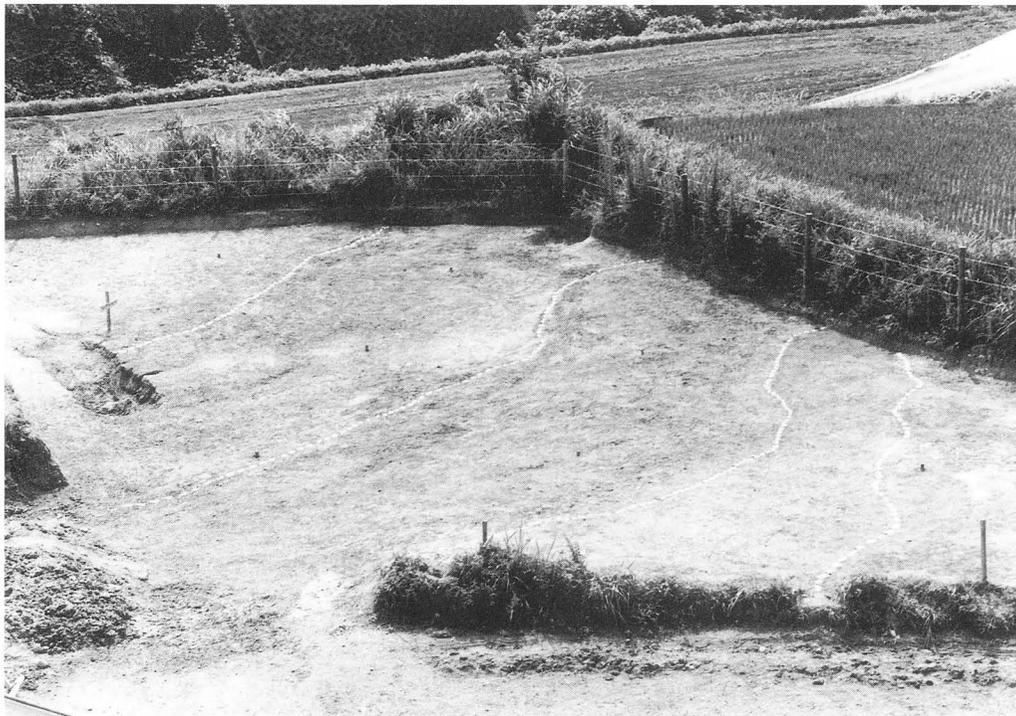
第 2 ・ 3 調査区完掘状況



第 1 調査区土層堆積状況



第 1 ～ 第 3 調査区出土遺物



第 4 調査区自然流路



第 4 調査区土層堆積状況



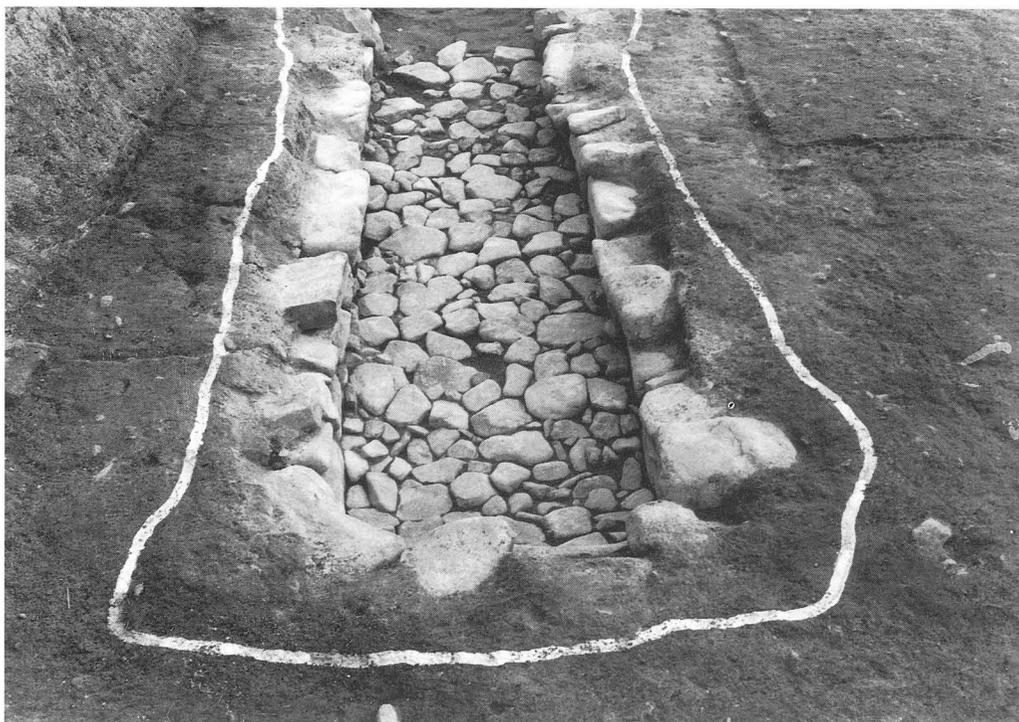
SM1001横穴式石室検出状況



SM1001横穴式石室掘り下げ状況



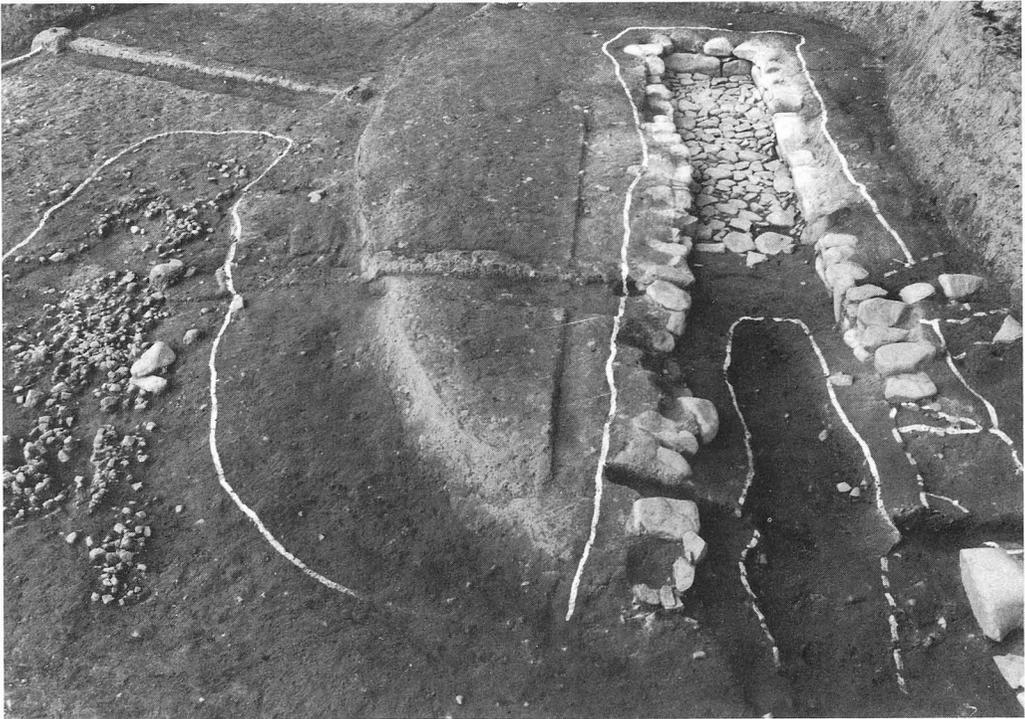
SM1001第一次床面検出状況 開口部より



SM1001第一次床面検出状況 奥壁部より



SM1001排水溝完掘状況



SM1001全景（南より）



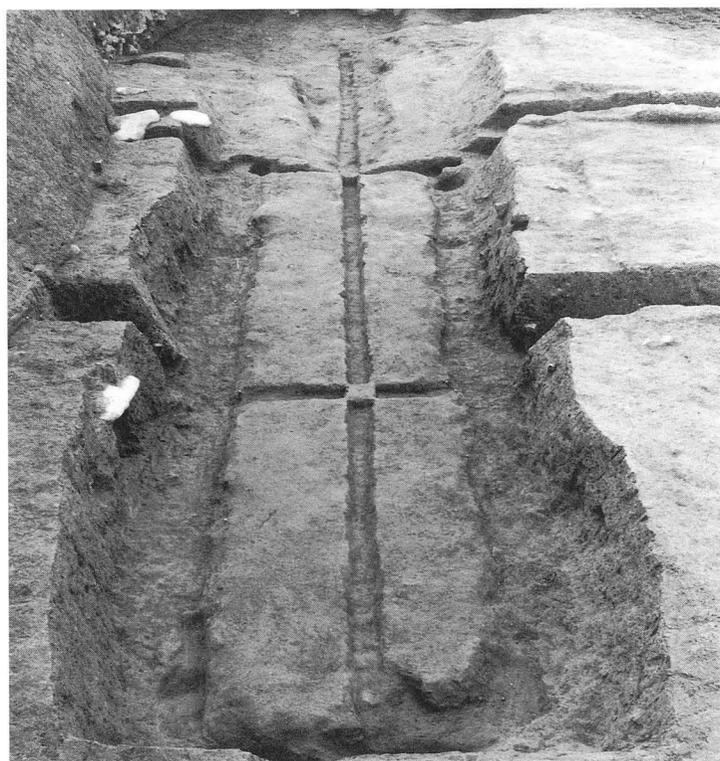
SM1001遺物出土狀況（排水溝上面）



SM1001遺物出土狀況（第一次床面下層）

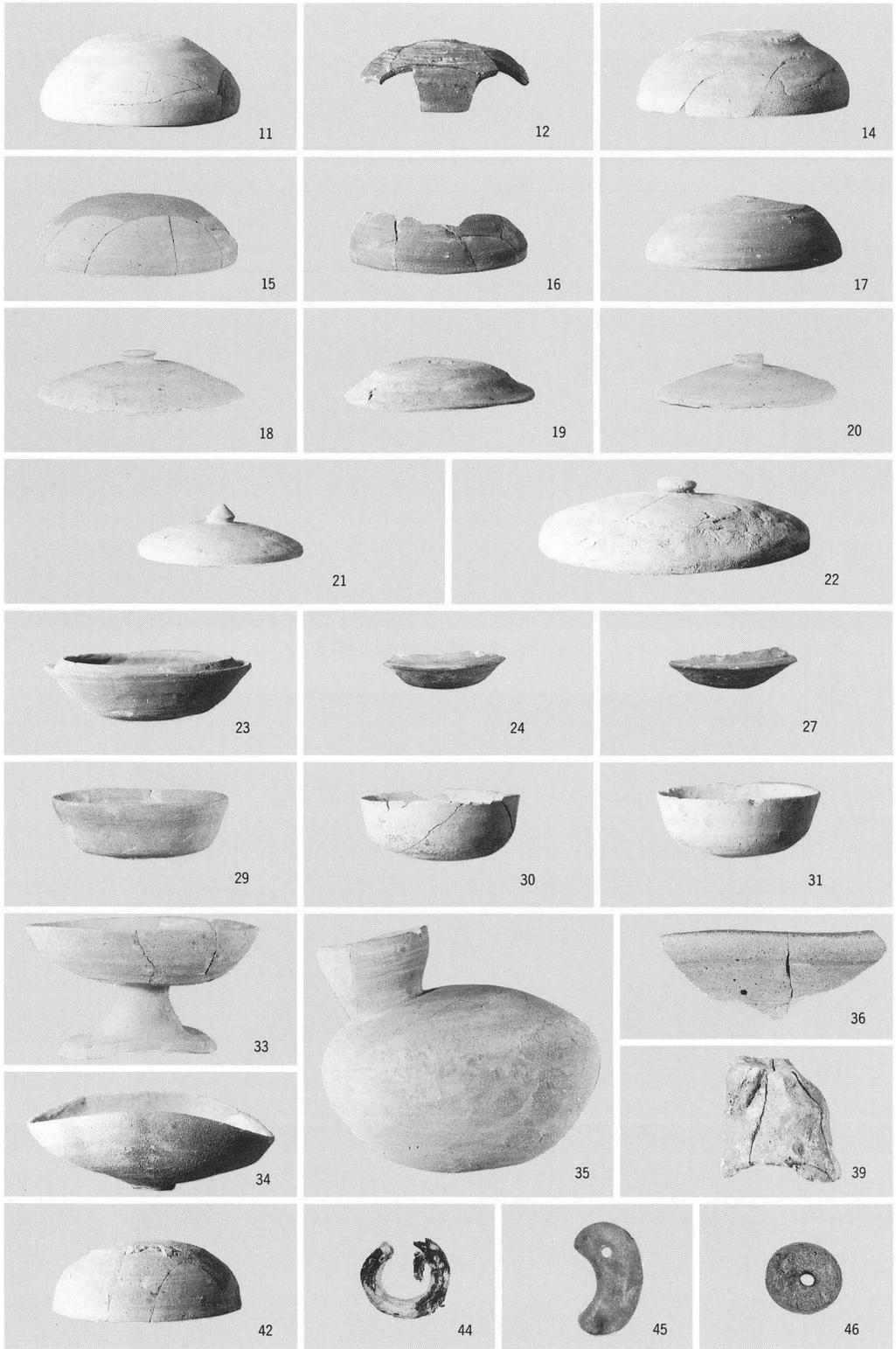


SM1001横穴式石室構築状況

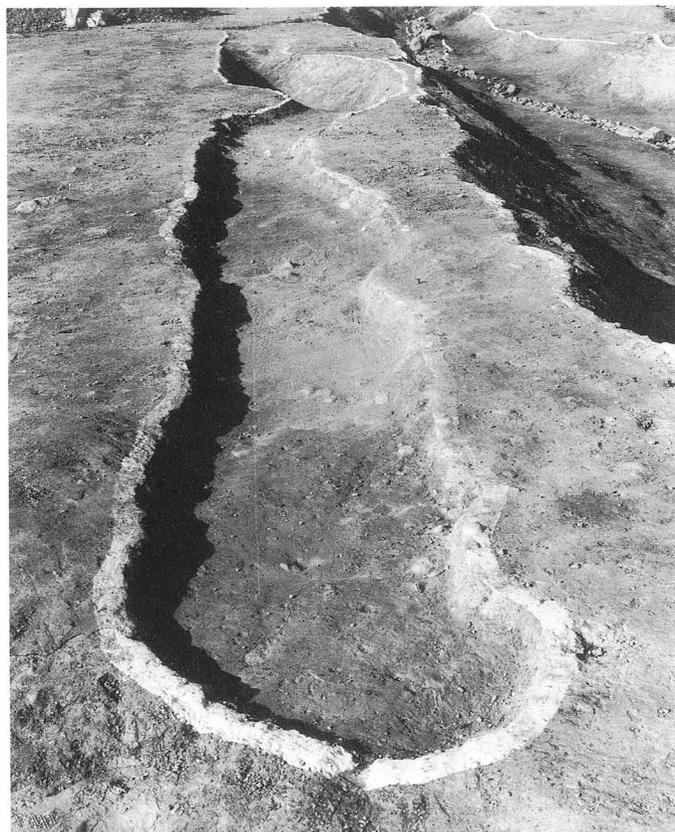


SM1001横穴式石室掘り方完掘状況

图版11



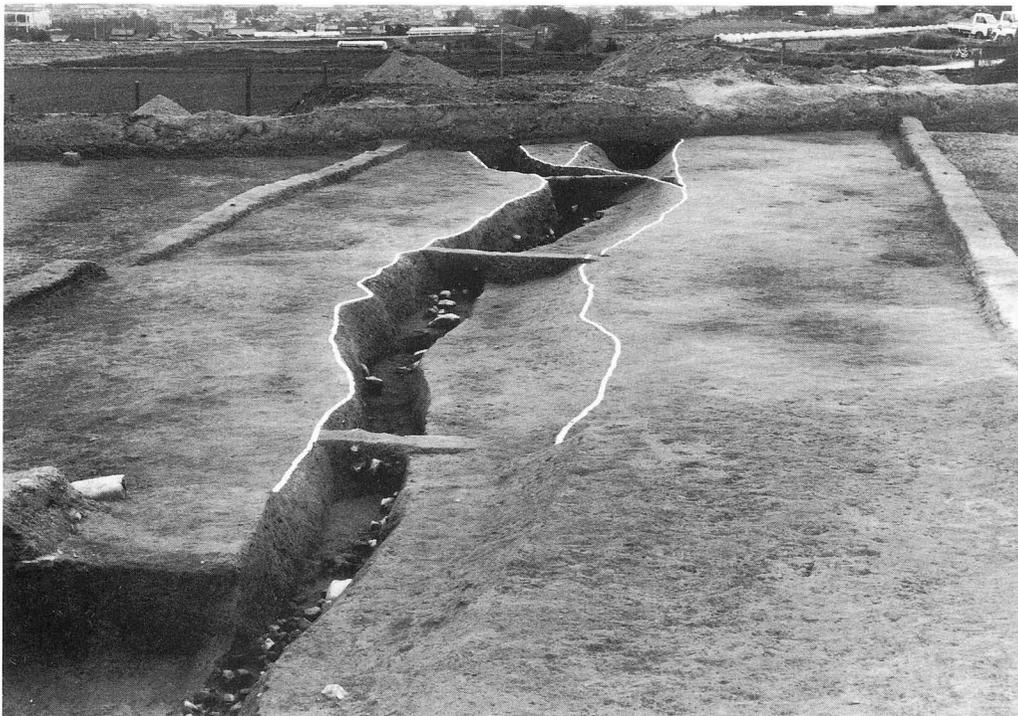
SM1001出土遺物



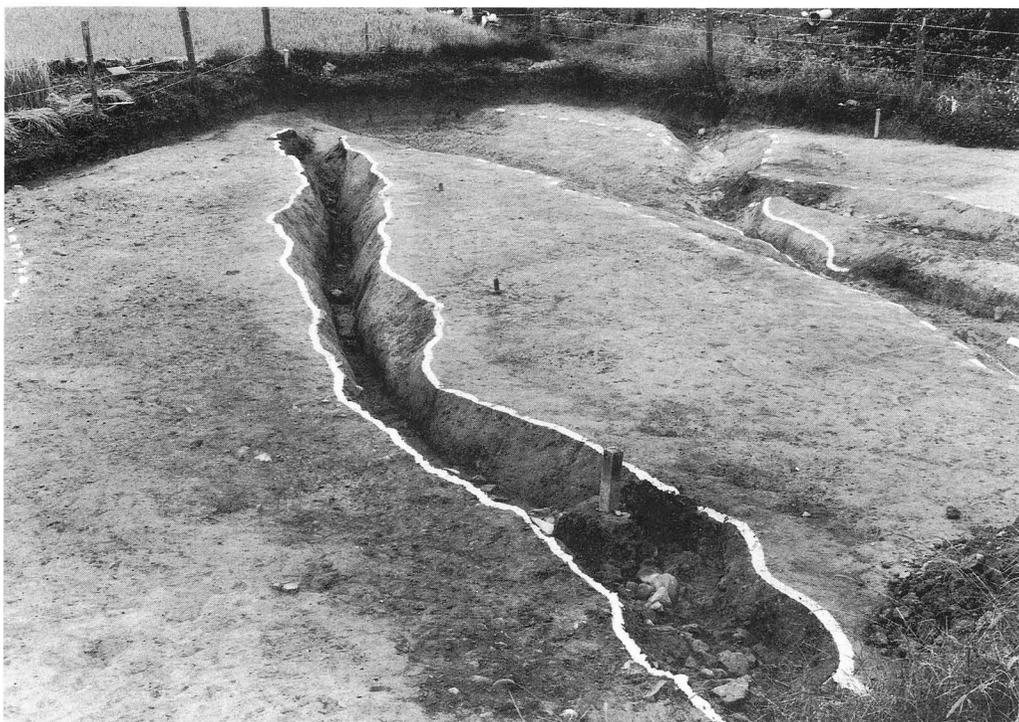
SD1001完掘状况



第5調査区SD1002・3完掘状况



第8調査区SD1002・3完掘状況



第9調査区SD1002・3完掘状況



第5調査区SD1002・3土層（C-C'断面）



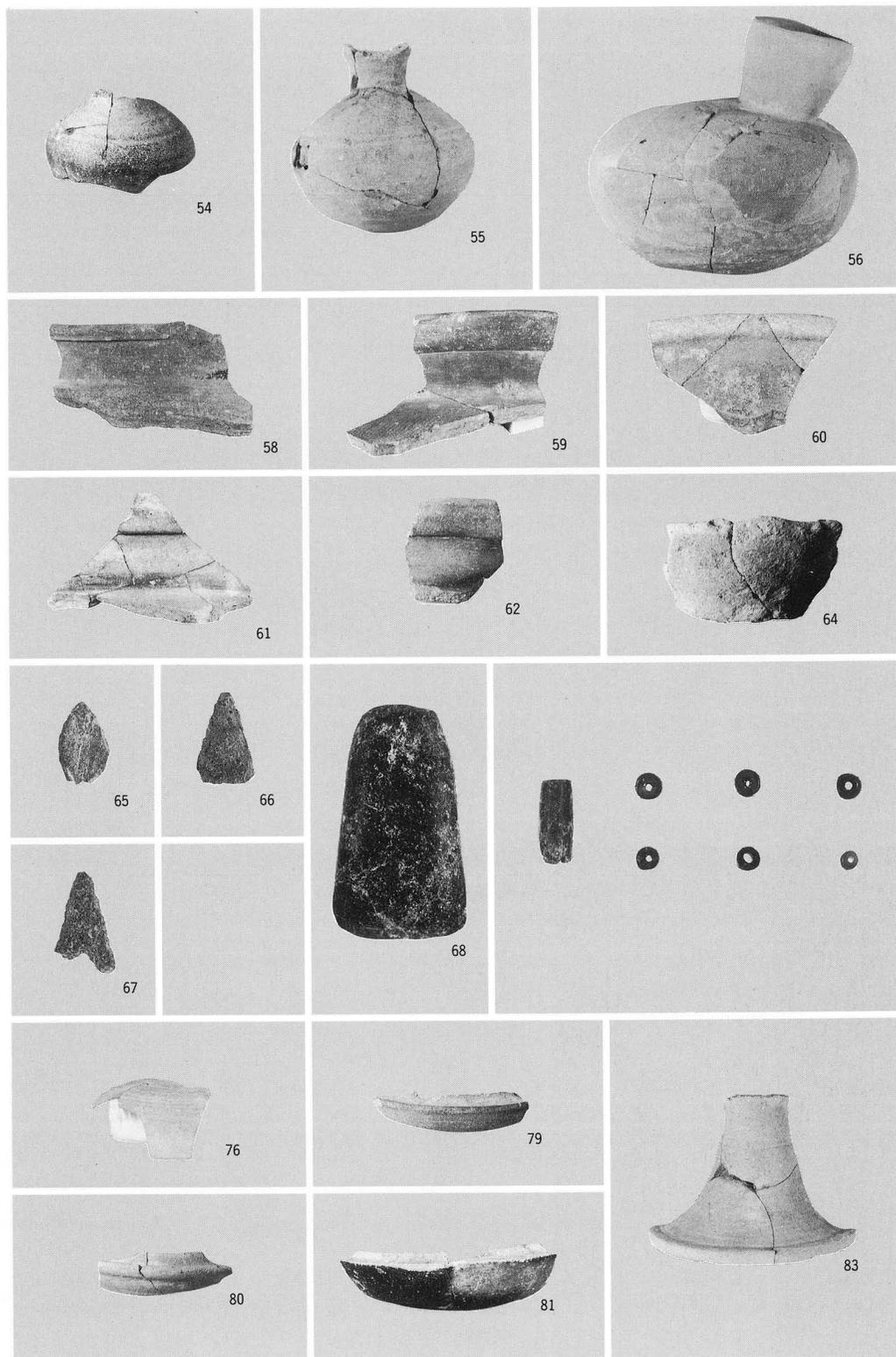
第7調査区SD1002・3土層（E-E'断面）



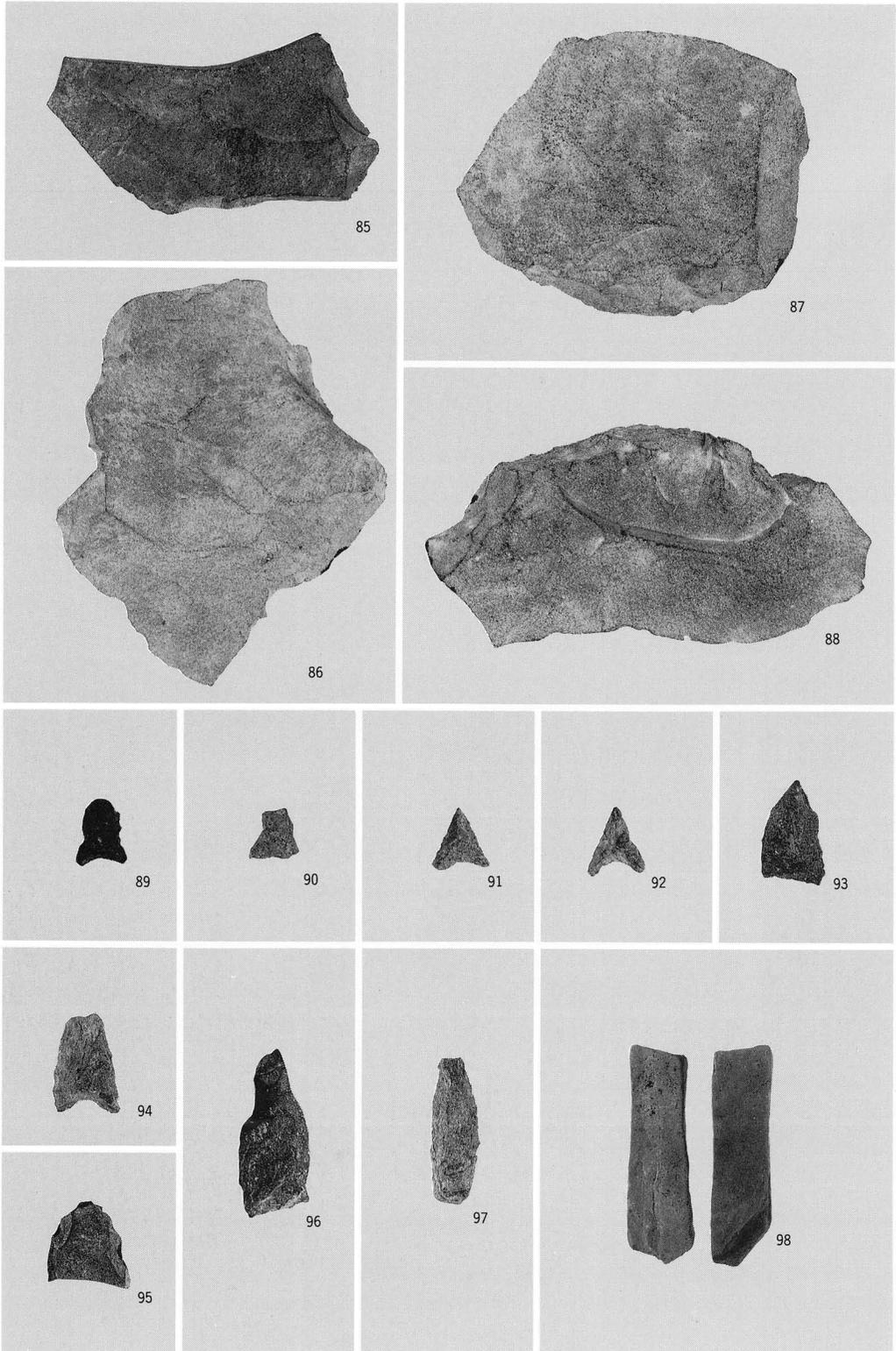
第8調査区SD1002・3土層（F-F'断面）



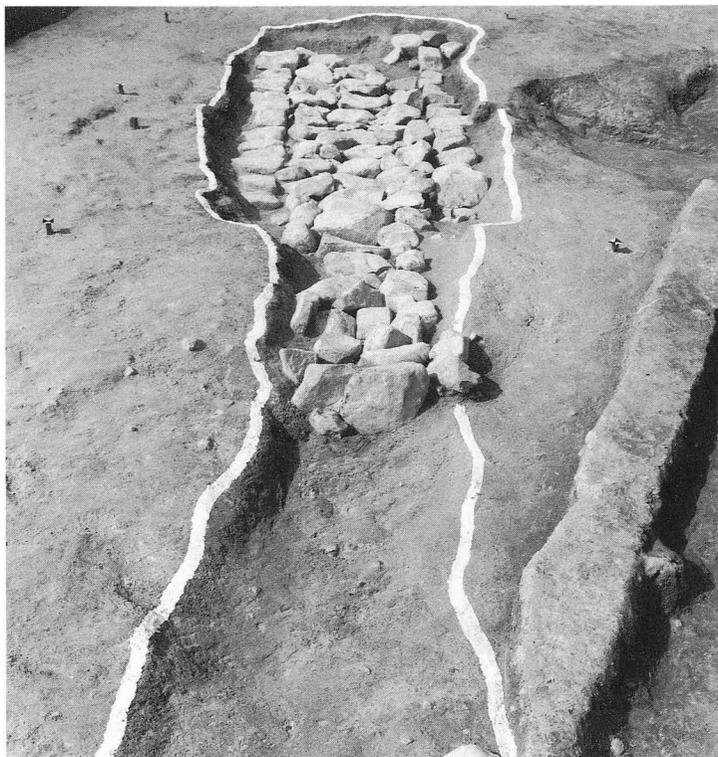
第8調査区SD1002・3（G-G'断面）



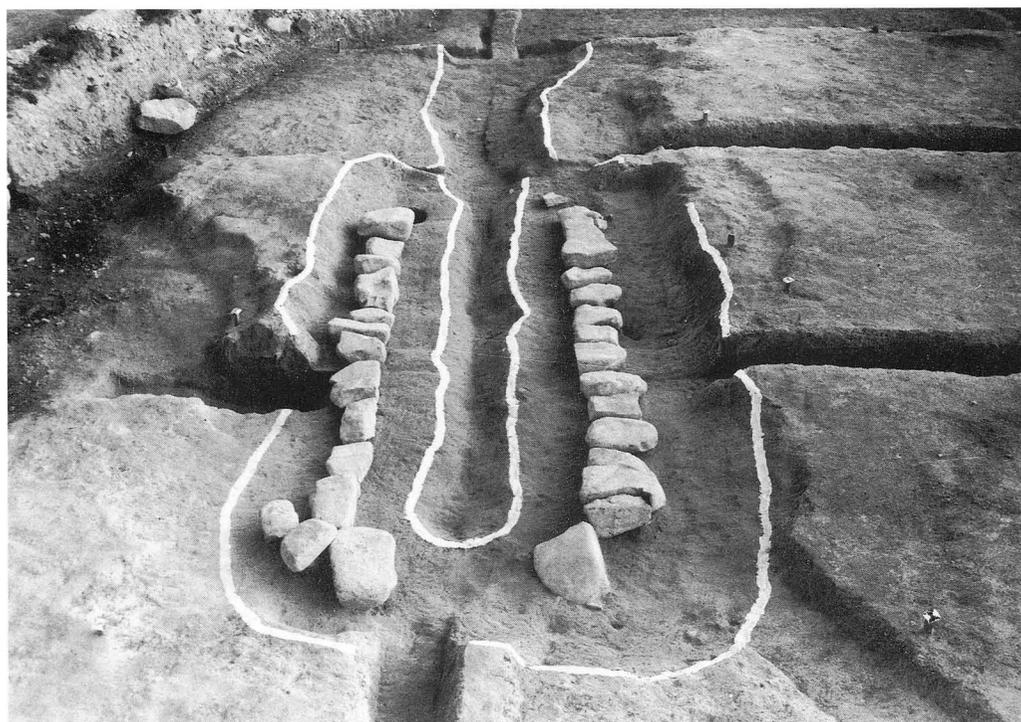
SD1002・3及び第4～第9調査区出土土器



第4～第9調査区出土石器



SM1002全景（南より）



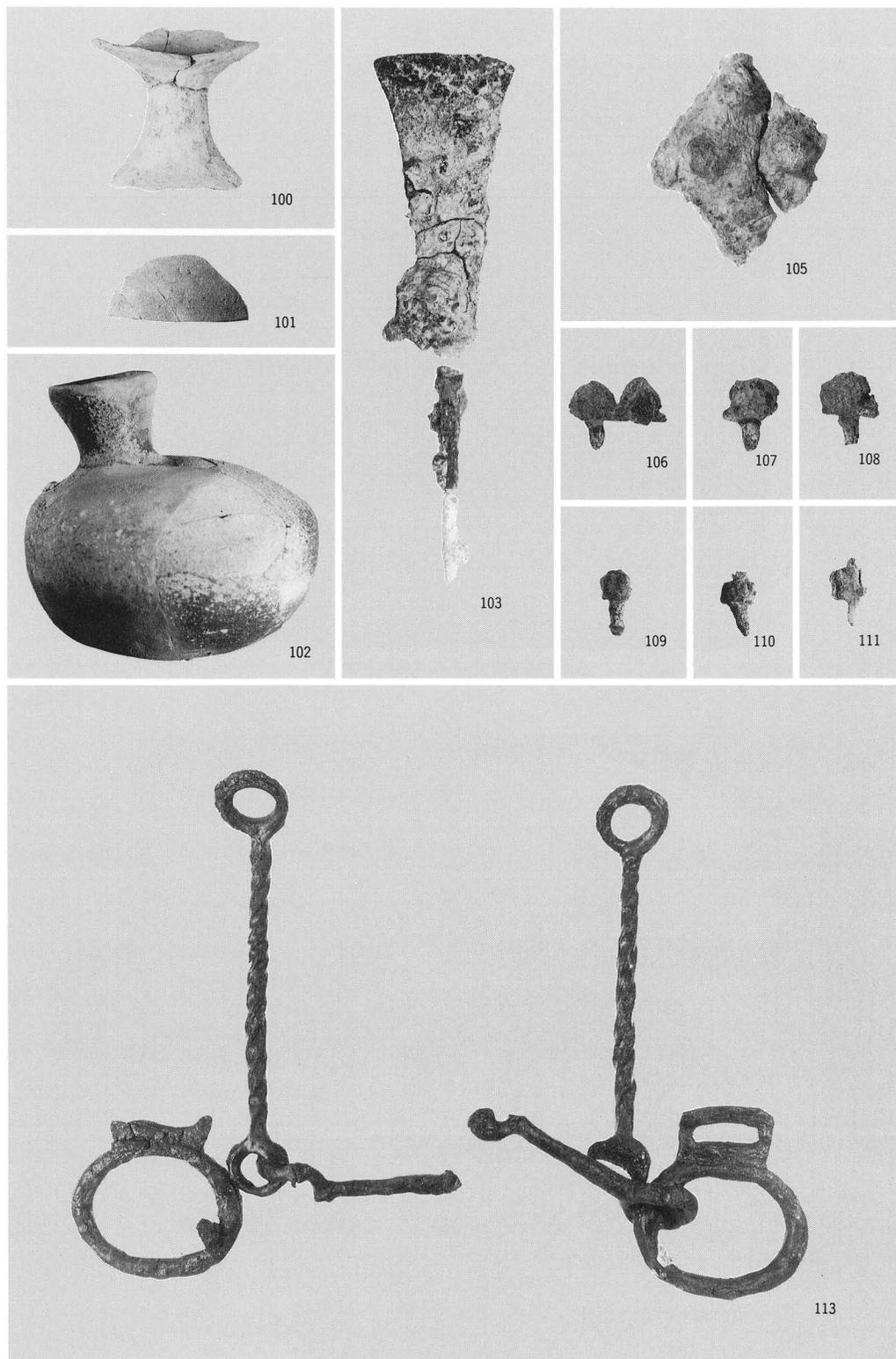
SM1002完掘状況



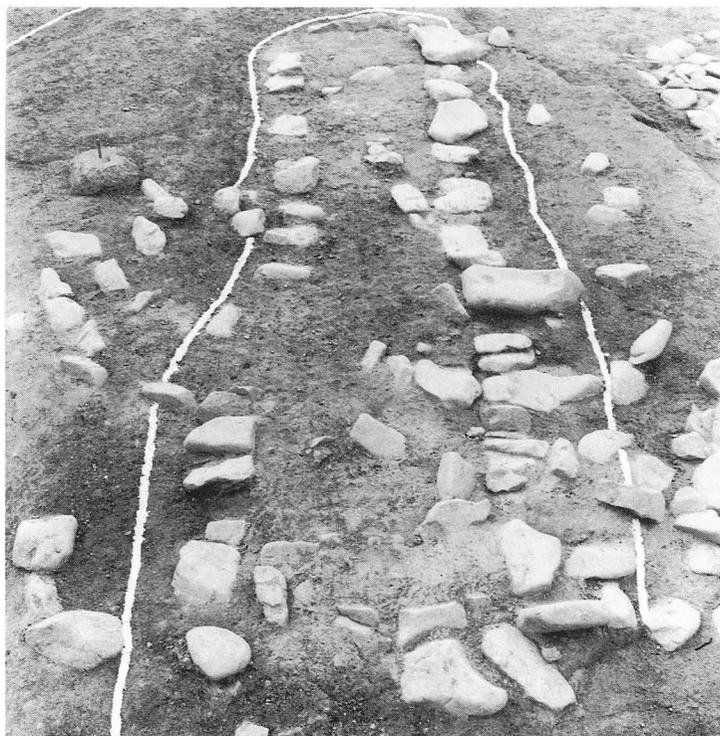
SM1002横穴式石室構築状況



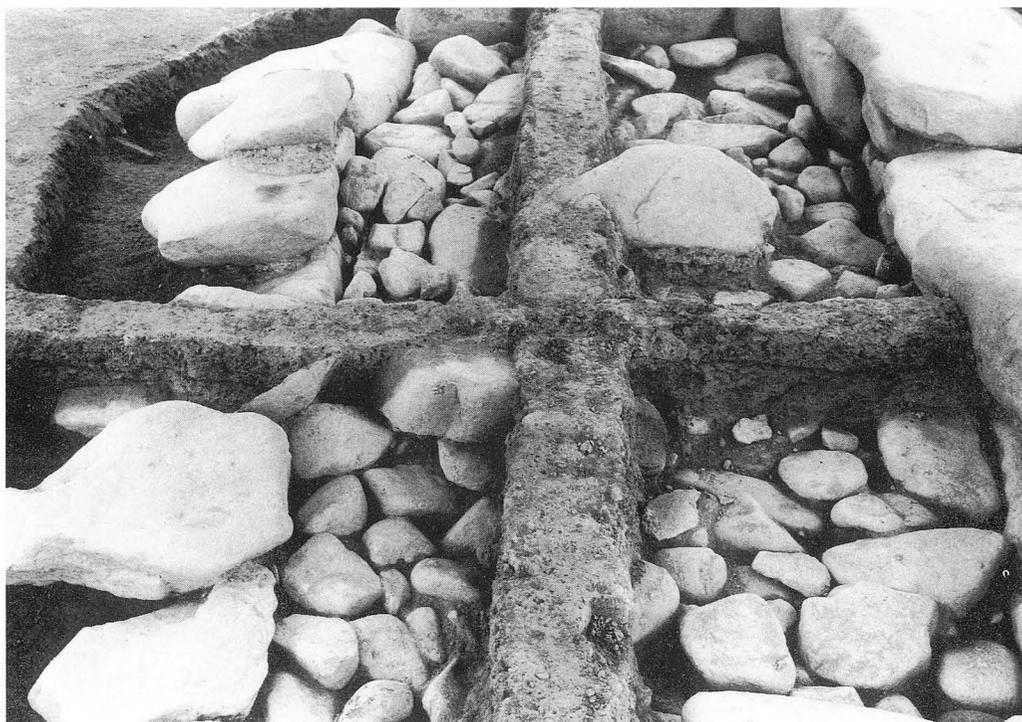
SM1002遺物出土状況



SM1002出土遺物



SM1003横穴式石室検出状況



SM1003横穴式石室掘り下げ状況



SM1003第二次床面検出状況



SM1003第二次床面遺物出土状況



SM1003第一次床面検出状況



SM1003羨道部遺物出土状況



SM1003横穴式石室構築状況（玄門）



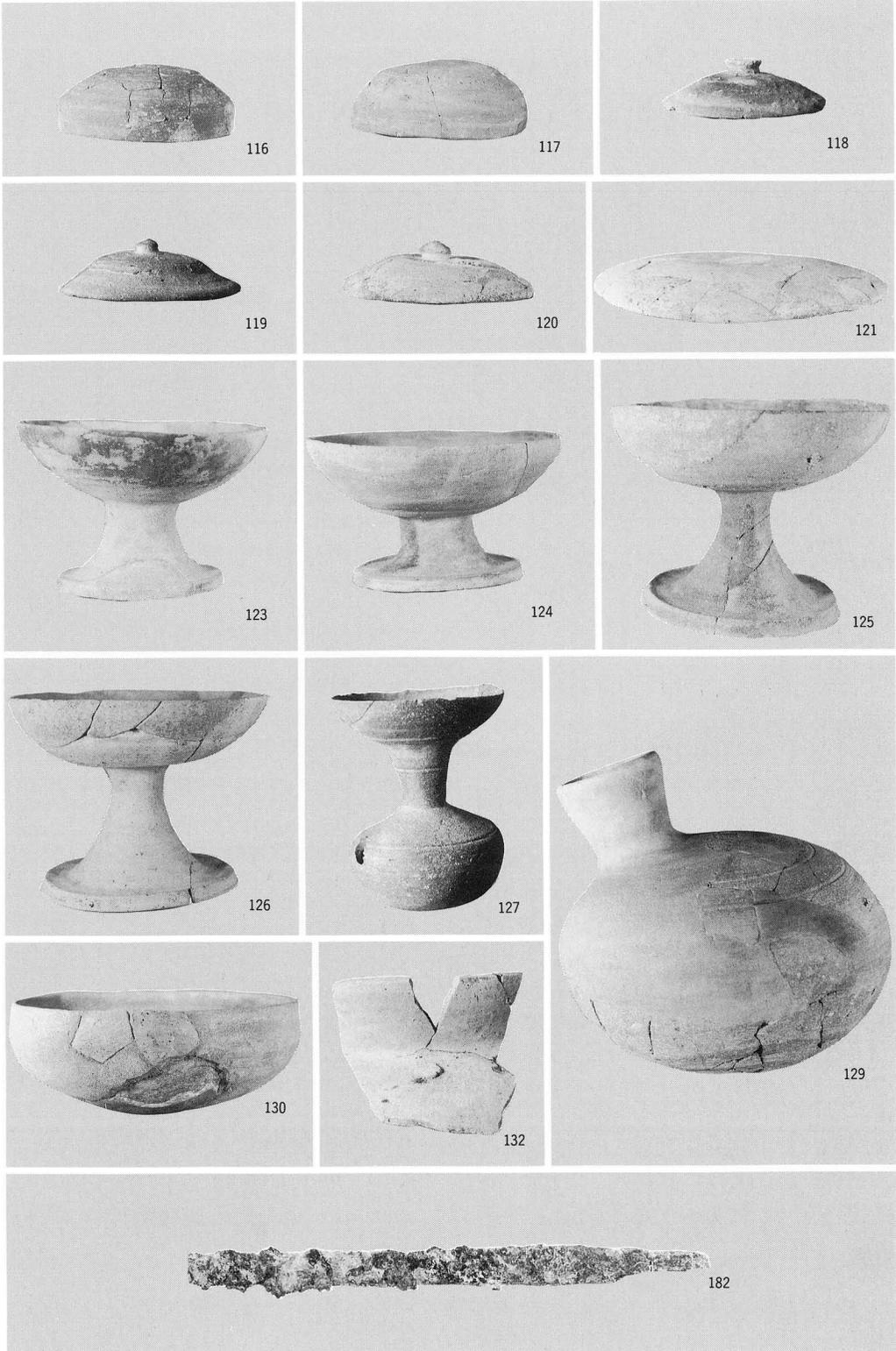
SM1003横穴式石室構築状況（羨門）



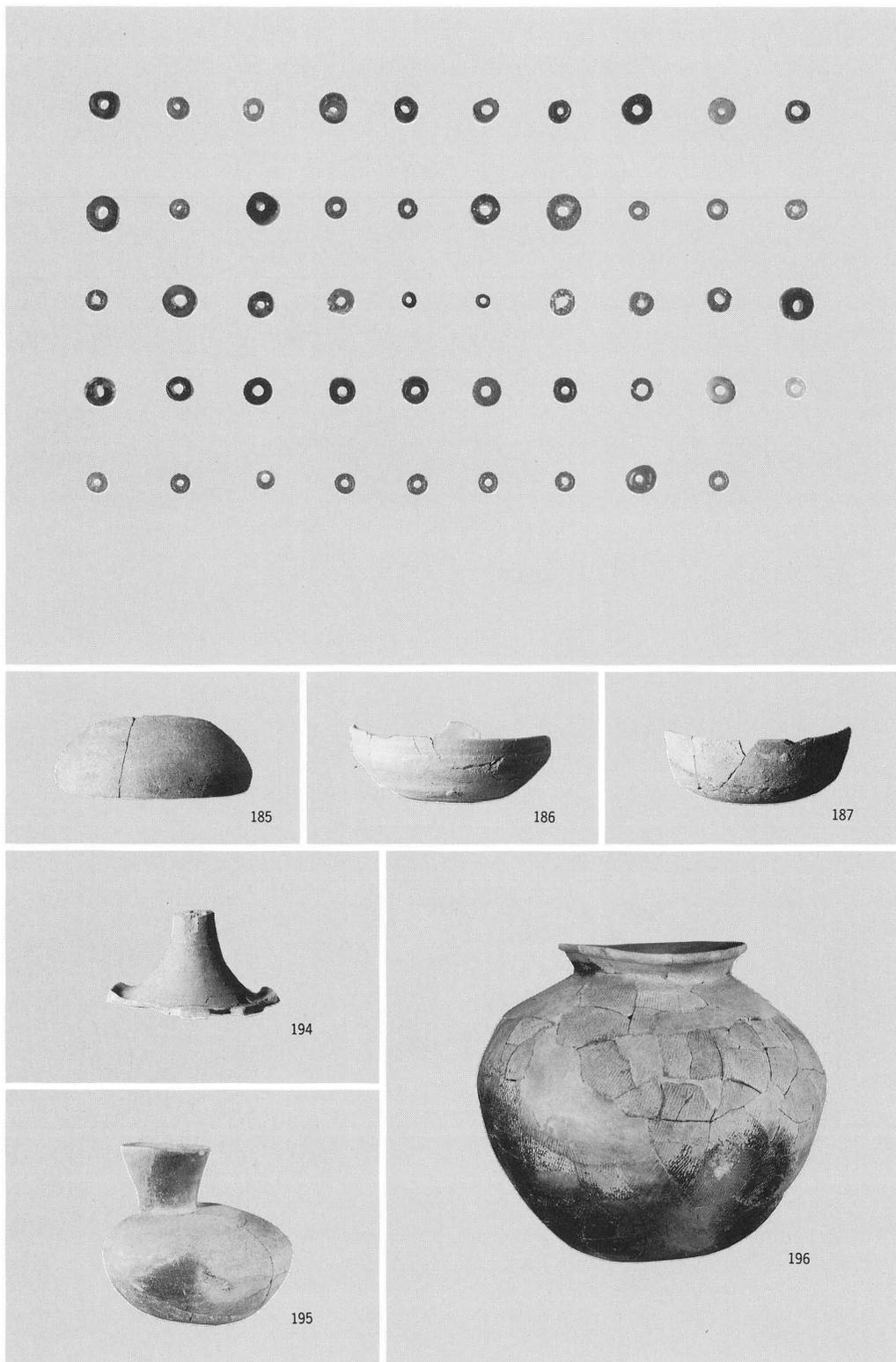
SM1003墳丘内遺物出土状況



SM1003墳丘断ち割り状況



SM1003出土遺物 (1)



SM1003出土遺物 (2)



SM1004横穴式石室検出状況



SM1004横穴式石室掘り下げ状況



SM1004第二次床面検出状況



SM1004第二次床面人骨出土状況



SM1004第一次床面検出状況



SM1004閉塞石内遺物出土状況